鍛えぬかれたフォームにこそ、メカの真髄がある

■ジューキミシンは精密工学の結晶とうたわれる高級品。シャープなスタイリングで、その名を高めています。

ジューキ

東京重機工業株式会社

ハンドボール、アジア大会種目に

ハンドボールが、アジア競技大会に仲間入りを果した—。ＡＧＦ（アジア競技連盟）が、９月１日イラン・テヘラン市のヒルトンホテルで開いた評議員会（第２日）で決めたもの。アジア競技大会にとって19番目の競技となる。

各報道関係が伝えるところによれば、ハンドボールを加える議題は、クウェートが提案していたもので、８月29日テヘラン市の労働省会議場で開かれた評議員会（第１日）ではこの問題の協議を、２年後モントリオール（カナダ）で開くＡＧＦ評議員会まで見送ることに決めていた。

それが、急きょ、２日目の会議で検討され、一気に「採用」へこぎつけたのは、関係者にとって"突然の朗報"といってよかった。

日本協会は、かねてから、アジア競技大会への参加について研究を進めていたが、アジアに於けるハンドボールの普及などにもう一つ自信を得るまでに至らず、公式的な働きかけは、これまでいちども行っていなかった。

今回の決定についても、クウェートが、このような提案をＡＧＦに対し行っていたことさえ知らず、29日の会議決定〜２年後まで見送り〜も「当然」「仕方がない」という受けとめかただった。

それだけに、３日後の決議は、喜びよりも驚きがまず先に関係者の間には感じられた。

次の第８回アジア競技大会は４年後の一九七八年（昭53）、パキスタンの新首都イスラマバードで開かれるが、ハンドボールがこの大会から実施されるのか、「男女」なのかなど詳細は判っていない。これまで、パキスタンにハンドボール協会がある、という情報を日本協会はいちども得ていない。

オリンピックでの採用のあと、アジア競技大会、ユニバシアード（国際学生スポーツ大会）への参加を夢見ていた日本協会にとって、いっそう国際的な動きが活溌になるわけで、新たな発展へ、大きな励みとなる明かるい知らせであった。

なお、ＡＧＦ加盟29ケ国のうちハンドボールを行っている国、行おうとしている国は、公式、非公式情報を含め本誌の調べでは19ケ国である。（関連記事２頁）

モントリオールへの道

２年後のモントリオール・オリンピックにおける日本男子の活躍を占う意味で大いに注目されたドイツ民主共和国（東ドイツ）との国際試合が幕を閉じた。

６ケ月前の世界選手権で初めて対戦した時は、16—31と完ぶなきまでにたたきのめされ、今回のシリーズでも、あまり不甲斐ない試合ぶりを見せると、かえって日本のハンドボールのイメージダウンになってしまうのではないか、という消極的な声も聞こえていた。

相手に遠征の不利、本格的シーズンがこれからというハンデはあったものの、全日本は、よく食い下った。だが、勝てなかったという事実は厳然として残っている。やはり「善戦」で留ってしまったのだ。

全日本が粘れば粘るほど光るのは東ドイツの地力である。

ザイラー監督は「金メダルをとるためには、どのような条件も克服しなければならない」と語り、事実、かなりハードな今回のスケジュールにも、なんのクレームもつけなかった。

特に第１戦（東京）は、飛行機の大幅な遅延で、選手たちがベッドに入ったのは、試合日のあけがた近くであったにもかかわらず午前中には１時間の練習を行い、試合になると、まるで二〜三日も前から着いていたような顔で登場してきた。

技術では、かなりその差をせばめてきている日本も、このたくましさだけは、どうしようもない"差"となって残っている。

彼らは、バス一つで国境をこえ国際試合に出かける。

ナショナルチームに限らず、クラブチームも全国リーグなどはすべてこの方法だ。

それが知らず知らずのうちに選手たちに"根性"を植えつけることになるのだろう。

全日本選手も、けっして恵まれた練習環境や合宿条件におかれているわけではなく、甘えを許されているわけでもないのだが、まだまだ、欧州の一流選手のもっているこうした面でのパワーには見習うことがたくさんある。

勝利への執念も東ドイツはすごかった。勝つためにはなりふりかまわなかった。大同製鋼戦、全日本との最終戦で見せた引きのばし行為やストーリング。見方はいろいろあるだろうが、彼らは、必死になって勝とうとしていた"勝つことの貴重さを知っているからだろう。モントリオールの道は、どこまでも非情で過酷である。

「ハンドボール」49年10月号（第124号）目次

【表紙写真】 東ドイツ—全日本
①"世界の左腕"ガンショウが強烈な７ＭＴを放つ瞬間、ＧＫは本田（８月31日・東京体育館）
【撮影・山田真市】

問題多いアジアハンドボール界

アジア大会参加は果たしたが……

アジア競技大会への参加は、日本ハンドボール界の夢の一つであった。
具体的な働きかけを、そろそろ始めようということにもなっていた。
それが突然〝実現〟した。日本の手が一つもかからずに成ったことで、関係者はちょっと首をひねりながらも、朗報として受けとめたものだ。
だが、アジアの複雑な情勢は、ハンドボール界をも、例外なくおし包みそうで、前途は、むしろこれまで以上に波乱ぶくみである。
アジア大会参加の〝周辺〟と今後——編集部では、できるかぎりの情報と資料を集めてみた。

実施説と見送り説と

8月31日、東ドイツチームとの第1戦を迎えた東京体育館で日本協会役員は、奇妙な会話をやりとりしていた。

「アジア大会種目にようやく入ったようだネ」

「なにを云ってるのだい、その審議は見送りになったばかりだ」

「そんなことはない。新聞で読んだ」

「そんなことはない。新聞で見たんだ」

役員ばかりではなかった。選手の間でも、ファンの間でも、漫才もどきの会話がかわされていたのである。

種あかしはこうだった。8月29日テヘラン（イラン）で開かれたAGF（アジア競技連盟）評議員会の結果として、多くの報道関係は「クウェートから提案されたハンドボールをアジア競技大会種目に追加する件は、2年後モントリオール・オリンピックの際開かれるAGF評議員会で再検討することになり、今回は見送られた」と伝えたのだが、29日テヘラン発のロイター電として朝日だけは「AGFは29日、ハンドボールを正式競技に加えることを決めた。これはクウェートから提案されたもの」というニュースを掲げたのである。

権威ある各報道機関が、このような食いちがいを見せたのはめずらしいことで、まして、日本協会は、今回、アジア大会にハンドボール問題が採りあげるとは思ってもいず、ノーマークだっただけに右往左往したのはムリなかった。

結局、日本選手団が帰国後、AGF評議員会に出席したかたたちから真偽のほどを確めよう、ということになり、ムード的には「見送り説」の方に傾いていた。

消極的だったこれまで

というのは、あまりにも、この話題が唐突に表面へでてきたことと、提案国が、これまで国際ハンドボール界でほとんど実績のないクウェートであったからだ。

もし、これまでに、アジア各国が、ハンドボールをアジア大会に加えようという動きをしていたのなら、AGFが、この問題を採りあげても、別に驚きはしなかったのだろうが、そうした働きかけは日本を含めどの国も、公式的にはいちどもしていなかったのである

日本では、一九五八年（昭33）、第3回大会が東京で開かれると決まった時、参加を打診、せめてオープン競技にでもと話し合われたこともあったが陽の目を見ず、最近では、もし、一九七八年の第8回大会が福岡市で行われる場合は積極的に参加運動を展開しようという話が持ちあがり、常務理事会でも議題となったが、福岡開催が成らなかったため自然消滅している。

日本以外の各国でも、アジア大会参加を理想としながら具体的には動かず、3年前の秋、ミュンヘンオリンピックアジア予選でイスラエル、韓国、日本の代表者が東京に集結した時でさえ、何も話し合われていない。

最近になって、ようやくアジアにおけるハンドボールの芽が伸びはじめ、日本協会・荒川清美理事長も「モントリオールオリンピックのアジア予選時に各国が集ったら、一九八二年のアジア大会を参加目標に動き出すことを話し合おうか……」と云いはじめていた程度。それも遠い先の話というニュアンスが強かった。

意外、クウェートからの提案

それが、クウェートによって突然、急転回を見せたのである。

クウェートは、れっきとしたIHF（国際ハンドボール連盟）加盟国だ。だが、その活動については競技人口が二千人、成人男女のチームが合わせて百程度のことしか判らず、国際試合などの実績も伝わって来ない。世界選手権やオリンピックに参加の意思表示をしたこともない。

わずかに3年前スウェーデンで

開かれた第2回IHFトレーナー・シンポジウムで、クウェートの指導責任者という大学教授が、日本の竹野奉昭氏（現全日本監督、当時全日本コーチ）と会っているのが唯一の〝接触〟で、国際審判員名簿にもリストアップされているものの、実績はない。
　そのクウェートがAGFに対してアジア大会入りの働きかけを行うとは渡辺和美IHFアジア代表理事（日本協会副会長）でさえ「初耳」だったのである。

急転、一気に「実施」決まる

　ところが、3日後、こんどは各紙一せいに「クウェートから提案されていたハンドボールを加える問題については、19競技目の種目として追加が決まった」と、9月1日のAGF評議員会決議を報じたのである。
　狐につまれたようなものであった。
　2年後までお預けと思ったのがわずか100時間足らずのうちに現実となり、〝アジア大会〟はがぜん日本ハンドボール界に身近なものとして映りはじめた。
　仮に、モントリオールでのAGF評議員会で、採用が決まったとしても、実際に行われるのは「次の次の大会(一九八二年)」というみかたが強かったのだが、ここで決まったからには、4年後のイスラマバード（パキスタン）大会での実施が有望である。
　ミュンヘン・オリンピックでの開催が決まった時と同じような興奮が身体の中を走りぬけた人も多かった。

いくつかの疑問残す

　だが「2年後」がどうして「3日後」に変ったのか。そしてロイター通信社だけが、なぜ29日の時点で「決定」を打電して来たのだろう。疑問は残った。
　日本協会事務局にお祝いムードで来合せた執行部のメンバーも、この二つの？について、いろいろと推測を立て、話をはずませたがつまるところは、八千キロもはなれたテヘランでのできごと、4日前と同じように日本体協やJOC（日本オリンピック委員会）の役員が帰国してから聞いてみようということに落ちつかざるを得なかった。
　「それにつけてもクウェートがねェ。やるもんだなァ」と云ったのは荒川理事長だったが、クウェートからの提案も疑問といえば疑問さらに、今なおAGF評議員会2日目（9月1日）の議決が、はたして本当に行われたのかどうか不明確だという説もあるのである。
　この会議に出席した日本関係者が、本誌〆切り日までに帰国していないため事情を詳らかにできないのだが、テヘランから戻った日本体協のある有力役員は「ハンドボール問題は2年後まで棚上げのままだが……」と日本協会の問い合せに首をひねっているほどだ。
　これから推してもAGFは実にあっさりハンドボールの追加を認めたようである。

【アジア競技連盟加盟国(29)】

アフガニスタン	
アラブ首長国連邦	
バーレーン	◇（外部情報）
ビルマ	
中国	□
ホンコン	△
インド	△
インドネシア	◇（本誌調べ）
イラン	
イラク	△
イスラエル	◎
日本	◎
クメール	
韓国	◎
クウェート	◎
ラオス	
レバノン	◎
マレーシア	◇（外部情報）
モンゴル	◇（本誌調べ）
ネパール	
パキスタン	◇（外部情報）
フィリピン	
サウジアラビア	△
シリア	◎
シンガポール	◇（外部情報）
スリランカ	
朝鮮民主主義人民共和国	△
タイ	◇（外部情報）
南ベトナム	

【アジア競技連盟非加盟国】

台湾	◎
ヨルダン	◎

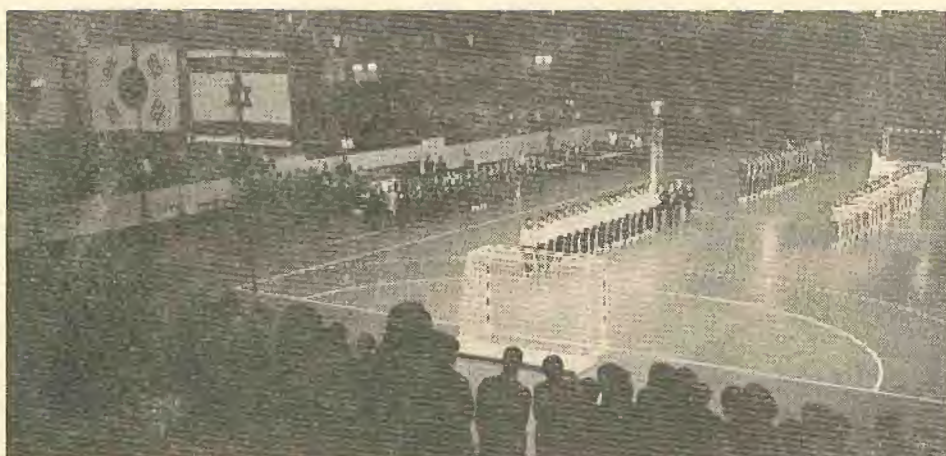
◎印　IHF加盟国
△印　IHFに加盟申請中の国
□印　ハンドボールを行っている国
◇印　ハンドボールを行おうとしている国

普及めざましいアジア

　アジア大会採用が4年後から確定したとして話を進めよう。
　本誌の調べによると、アジアにおけるハンドボール情勢は別表のとおりである。
　実は、この表の中で、日本協会が直接手紙などをやりとりして、相手の組織を確認している国は少いのだが、それにしても、読者の想像以上にアジアにおけるハンドボールの普及は遂げられつつあるのではなかろうか。
　これだけの国全部が、やがてIHFに加盟したらアジアは大勢力になる。
　現在の分布はヨーロッパ24、アフリカ17、アメリカ5、アジア8の計54なのだから、アジアの結束が成れば、世界選手権やオリンピックでの出場枠配当数も現在のように「1」に留ることはない。
　アジア選手権、アジアカップ、アジアサーキット…考えただけでも楽しくなる。
　しかし、明かるい見通しばかりではないのである。むしろ前途に横たわる課題は、日本協会にとっても、あまりにも難解な内容をもつものばかりである。
　パキスタンでハンドボールは行われているのだろうか。
　海外事情に詳しい人たちも「判らない」といい「これから始めるのだろう」という。
　IHF加盟国がAGF加盟国のうち6ケ国にすぎないという事実も〝不安〟である。
　IHF渡辺理事によれば「IHFは、将来、IHFに加盟しようという意思のある国となら、その国が未加盟国であっても交流してもさしつかえないとしている」というが、現時点における加盟国－非加盟国の数比はあまりにもアンバランスだ。
　これでもなお、IHFはアジア大会のハンドボールを〝公認〟するだろうか。
　これから4年の間に朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)、ホンコンインド、イラク、サウジアラビアなどの準（仮）加盟国が、正加盟国になったとしても、かなりの数の試合に非加盟国が関係してこよ

う。

若いスポーツ、とりわけアジアでは新しいスポーツであることをIHFに認識させる努力が必要だ。



3年前のミュンヘンオリンピックアジア予選に参加したのは日本，韓国，イスラエルの3ケ国だけだったが，その後アジアのハンドボールは急速に伸びた，それだけに問題も多い（写真はミュンヘン予選開会式，46年11月14日・東京体育館）

中国らでアジア連盟準備

こうした問題は自力で「解決」する道があるからいい。政治がからんできたらどうなるイスラエルとアラブ諸国との深刻な〃関係〃や、AGFにおける中国の位置の大きさも、中国がIHF未加盟国とはいえ、アジアハンドボール界にとっては今後、見落すことのできないものであるハズだ。

その心配を裏付けるようなニュースがすでに舞いこんでいる。

中国、クウェート、パキスタン、朝鮮民主主義人民共和国、イラク、バーレーン、インドの七ケ国が、9月4日テヘランで会議を開き、来年の1月か2月に「アジアハンドボール連盟」を発足させるための準備を行うことを決めた、という新華社電（4日、テヘラン発）を中国通信が5日東京から伝えていることだ。

これは、クウェートとパキスタンの提案によるものだと云われるが、この七ケ国のうち、IHF加盟国はクウェートだけ。

IHFのメンバーである日本が韓国が、イスラエルがなぜこの場に招じられていないのか。問題はあまりにも複雑であり深刻であり微妙である。

渡辺IHF理事は「地域連盟はIHF加盟国によって構成されなければならない。非加盟国だけで連合するケースはアフリカの一部にもみられ、それはそれで自由だが、その中へ加盟国や、準加盟国が加るのは問題だ」と云っており10月4日からイタリアで開かれる第15回IHF総会で話し合われるのではないかともみている。

注目されるIHF総会

中国など7ケ国が、来春早々アジア連盟を結成することは、当然のことながらこれまでに示された韓国などの動きとは、まったく「別のもの」である。

日本協会では、9月14日の月例常務理事会で、この問題を話し合ったが、この連盟自体がまだ準備中であることや、アジア大会実施問題を含めてテヘランでの全ぼうがつかめていないことなどから、当分静観するとともに、IHFの出かたを見守ることにまとまった

日本協会は、中国でハンドボール復活の確証が得られたこと（＝本誌前号詳報）もあって、中国との交流について、新しい方向を打ち出そうとした矢先に、まるで旋風のようにおこった「アジア問題」のため、すべてが後手後手にまわってしまった感じを否めない。

荒川理事長は、態勢たてなおしのチャンスを、10月のIHF総会としており、自から4年ぶりにこの会議への出席を決めるほど、熱意を示している。

どうなるモントリオール予選

当面、アジアのハンドボール界で問題となるのはモントリオールオリンピックのアジア予選（男子）をどうするか、である。

現時点で参加資格のあるのは日本、韓国、台湾、イスラエル、クウェート、レバノン、ヨルダン、シリアの8ケ国である。

10月のIHF総会で準（仮）加盟中の国が、どう取り扱はれるかで変ってくるし、中国が、今後どうIOCと結びついてくるかも見逃せない。

さらに、日本ハンドボール界は〃台湾問題〃が未解決なのである

現在は、IHFメンバーとしてのみ対戦することはあるとしながらも、協会姿勢は、48年1月の全国会議（評議員会・理事会）に於いて「中国承認」を打ち出している日本体協、JOCの態度尊重を決めているのだ。

中国ハンドボール界の復活が明きらかとなった以上、この線はいっそう色濃くなるハズだが、IHFが「台湾追放」には「ノー」の見解をとっており、解決には手間どりそうである。

それまでに、中国らのアジアハンドボール連盟が結成され、もしクウェート以外の国のいくつかもIHFのメンバーになっていたとしたら、糸はいっそうもつれてしまう。

アジア大会参加までには、まだ4年の才月があるが、解決をせまられている問題の期限は、おそらく今秋から来春早々にかけて、ということになりそうだ。

渡辺IHF理事、荒川理事長の帰国を待って、日本協会は10月13日に全国評議員会、理事会の招集を決めている。

アジア大会実施を喜ぶ一方、ピンチとは云わないまでも、日本協会がかってない重大な局面に立たされていることは事実である。

東ドイツ、攻守に鋭い切れ味

国際試合　日本勢の健斗も目立つ

モントリオールオリンピックの有力金メダル候補・ドイツ民主共和国（東ドイツ、世界選手権2位）を迎えた国際親善試合は、スポーツ界の注目を一身に集め、8月31日から9月8日まで全国5都市で6試合が行われた。

東ドイツは、定評どおりの組織プレーと秀れた個人技を巧みに使い分けた攻撃力、世界選手権でフェアプレー賞に輝やいた守備力にものを云わせ全勝、切れ味鋭い「東欧の強さ」を見せつけた。

日本勢の健斗も目立ち特に、最終戦における全日本と、単独ながら一歩もひかずに挑んだチャンピオン・大同製鋼（愛知）の試合ぶりは特筆すべきものがあった。R・ハリー団長ら一行18名は11日空路帰国。

第21回　NHK杯大会

旅の疲れ見せぬたくましさ

東ドイツの来日第1戦は全日本との公式国際試合1回戦、「第21回NHK杯大会」として8月31日午後3時47分から東京体育館で行われた。

審判員＝安藤純光、佐野和夫、公式計時員＝近藤金博公式記録員＝大塚文雄

（観衆三千三百）

	【日本】	得
GK	本田	0
	斎藤将	0
FP	蒲生	0
	木野	0
	藤中	6
	中井	2
	有永	0
	菊池	2
	佐藤	1
	佐々木	0
	花輪	0
	飯田	0
	7MT（1）	11

	【東ドイツ】	得
GK	フォークト	0
	ヴァイス	0
FP	ガンショウ	4
	P・ロスト	0
	ヒルデブラント	2
	ベーメ	3
	ラケンマハー	3
	エンゲル	1
	ピーチュ	0
	ケーラート	1
	J・ロスト	2
	D・シュミット	1
	（4）	17

東ドイツ　17（8−6／9−5）11　全日本

（後記）　小山敏昭（共同通信社運動部）

東ドイツは、前夜おそく羽田に着き、充分な睡眠−休養はとれていなかったはずだが、早くもこの日午前中には1時間の練習を行い旅の疲れを見せぬたくましさを見せつけた。

今春の世界選手権で2位になったのを始め、今や世界のトップクラスに君臨する東ドイツ。

これに対して全日本はモントリオールオリンピックを目指してチームを再編成、若手とベテランをミックスした〃新生〃チーム。

まだまだ全員の呼吸がまとまらない懸念を残してこの強敵に挑むことになった。そんな全日本をリードオフマン木野、中井がどうまとめてゆくか−。どんな試合展開に持ってゆくか−。勝敗以上にもこうしたかけひきが世界の一流相手にどこまで通じるか。興味深いものだった。

ホイッスルから2分間は互角の試合内容。『全日本もやるではないか』と思わせたのも束の間だった。巨砲ガンショウが強烈な7MTを決めて、東ドイツは一気にペースに乗ってしまった。3分エンゲルがゴール右から、6分にはベーメが切れ込むものすごいシュートを披露、あっさり3−0とリードを奪ってしまった。

ゴール前でフリーになりながらもディフェンスが飛びかかってくるとわかるとさらに巧みなコンビネーションパスを継ぎ決定的な形でショートを打つ。かと思えばポストから強引とも思えるシュートプレーで全日本の反則を誘い7MTを取る巧妙さ。点を取ることの難しい欧州のゲームで、その難しさをなんとかして乗り越え、得点しようとする〃執念〃がまさに現われていた。

一方全日本は10分過ぎからやっと歯車がかみ合い出し、パスミスオーバーステップなどつまらないミスがなくなってきた。木野に引っ張られた若い菊地、蒲生らが生きのいいプレーを発揮し出したか

2m選手ケーラートの攻撃をマークする中井（8月31日、東京、撮影山田真市）

対東ドイツ全日本選手団

▽監督　竹野幸昭（日体大出）▽コーチ　東嘉伸（日体大出）▽GK①本田洋（大阪イーグルス）⑫斎藤将一郎（日体大）▽FP⑦中井武三、⑧松原光三、⑭藤中憲二、⑮花輪博（以上大同製鋼）、⑥木野実（主将）、⑨津川昭、⑩穂積豊彦（以上湧永薬品）、④飯田誠行（大崎電気）、⑬佐藤要二（本田技研鈴鹿）、⑱佐々木健一（三景）、③有永修二（大阪福島ク）、⑪平野稔（海上自衛隊下総）、②蒲生晴明（中大）、⑤菊池悟（早大）、⑯斎藤幸司（日体大）、⑰村田幸男（法大）

○内数字は背番号。

らだ。久しぶりに全日本へ戻った有永も強烈なショートを放ち、東ドイツゴールをおびやかした。12分小柄な藤中が鮮かなジャンプシュートを突き刺した。上背のある東ドイツディフェンス陣の中央から、しかも頭上を越すすばらしいジャンプシュートだった。そして16分、17分を同じ形から3得点。どれも不意を突いたといった感じもあったが、同じ形で3ゴールも入るとは…。やはり藤中のタイミングの良さ、シュートコースのうまさなどが発揮されたといえようこれに勢いを得た全日本、20分に中井がゲットして6—5と1点差まで追い上げ、前半も8—6でわずか2点差。勝負を後半に持ち越した。

ところが後半、地力の差がはっきりとあらわれてしまった。選手ひとりひとりの運動量は全日本も東ドイツもそんなに差はないが、やはりスピード、それにテクニックとなると全日本はついてゆけない。日本が得意とするはずの速攻でお株を取られ、またゴール前の素速いゆさぶりでディフェンスをクリ出して、10分過ぎには12—7と水をあけてしまった。これに対し全日本は10分おきぐらいに点を取るのが精一杯。フォークトの守りにシュートは全くネットをゆすれなくなってしまった。ただ19分、木野から菊地と継いだ好パスで決めたのが光る程度で、単調な攻撃を繰り返すばかりだった。やはり懸念されたベテランと若手の息の差。ベテランに遠慮してショートを打たない若手の消極さなどが、かんじんなところで暴露されてしまった。相手は世界最強のチームのひとつなのだから、〝胸を借りてやろう〟といった気迫がもう少しあればと惜しまれる。それに今の全日本は大型選手がそろい迫力があるものの、同じタイプの選手が多く、サイドからの攻撃に決め手を持つプレーヤーがいないことだ。まともにぶつかって勝てない相手にまともな攻撃をしていては能がない。攻撃に変化をつけることが必要であろう。そういった差が17—11という点差にあらわれてきたようだ。

東ドイツ来日選手名簿

▽団長
レイニング・ハリー（47才）
▽コーチ
ハインツ・ザイラー（54才）
ポール・ティーデマン（39才）
▽ドクター
ペーター・リック（32才）
▽GK
①シーグフライト・フォークト 71（・）
⑫クラウス・ヴァイス 69（・）
⑯ヴィエラント・シュミット 4（・）
▽FP
②ライナー・ガンショウ 168（17）
③ペーター・ロスト 56（15）
④ユルゲン・ヒルデブラント 94（9）
⑤ウォルフガン・ベーメ 80（6）
⑥ウォルフガン・ラケンマハー 160（24）
⑦ハンス・エンゲル 45（4）
⑧ヨシム・ピーチュ 52（7）
⑨アクセル・ケーラート 42（4）
⑩ユルゲン・ロスト 12（24）
⑪デトマール・シュミット 31（9）
⑬クラウス・グルーナー 8（17）

・○内は今回の背番号
・選手名横の数字は公式国際試合出場数
・右（ ）内は日本での通算得点（6戦）

後半守りの乱れつかれる　全日本

第2戦は、全日本との公式国際試合2回戦として9月1日午後2時11分から東京体育館で行われた
審判員＝佐野和夫、安藤純光、公式計時員＝大塚文夫、公式記録員＝岡前義春　（観衆二千四百）

東ドイツ 22（13—5、9—8）13 全日本

得	【東ドイツ】		【日本】	得
0	W・シュミット	GK	斉藤将	0
0	ヴァイス	GK	本田	0
5	ガンショウ	FP	中井	1
4	ベーメ	FP	藤中	2
4	ラケンマハー	FP	木野	4
5	J・ロスト	FP	有永	0
1	P・ロスト	FP	村田	0
1	エンゲルト	FP	佐藤	5
0	D・シュミット	FP	佐々木	0
1	グルーナー	FP	蒲生	1
0	ピーチュ	FP	花輪	0
1	ヒルデブラント	FP	菊池	0
22	（5）	7MT	（0）	13

（後記）　大国拓哉（読売新聞運動部）

試合の興味は後半の立ちあがりで消えた。全日本は後半がはじまると、ディフェンスが前半とうってかわって甘くなった。攻めようか、攻めようとする気持ちの先走りからか、守りの方がお留守になったからだ。その守りの甘さを東ドイツに巧みにつかれて、4分までに連続3ゴールされて12—8。点差は〝あっ〟という間に開いた。これで試合は東ドイツの一方的なペース。5分に佐藤のジャンピングシュートで1点を返したものの、その後、15分までに連続6ゴールされるなど差は大きくなるばかり

前半、全日本は内容のある試合をした。「勝負をかけながら攻守でいろいろ試みてみる」という竹野監督。世界のカベで破るために……と、同監督が考えてきたプレーを試すのも、この大会のねらいの一つ。第一戦のときのように攻撃は中央からの藤中一人に頼らず佐藤、村田ら小型のテクニシャン

を投入、両サイドをいっぱいに使ったスピードのあるゆさぶり。右がダメなら左と素早くボールをまわし、チャンスとみればスカイプレーを、さらには白陣からの速攻と攻撃は多彩。おかげで藤中の時折見せる中央からのショートも生きた。2—2、4—4と全くの互格。20、21分にたて続けにゴールを許して、2点差となったが、全日本の変化攻撃は着実に1点ずつを返した。そして29分45秒に東ドイツがラケンマハーのシュートで9点目をあげると、全日本も終了3秒前の29分57秒に佐藤が、右から切り込んで1点差に食いさがるなど、後半に望みをつないだのだったが……。

「日本はいいチームだ。けれどヨーロッパの強豪と、もっと試合する必要がある」東ドイツのザイラー監督は第一戦が終ったとき指摘したが、後半その経験不足と若さが一度に出た。立ちあがりの精神的不安定さから攻守とも中途半ぱになってしまったからだ。

この全日本にとって惜しまれたのは前半28分の佐々木の攻撃。独走でノーマークのシュートチャンスをつかみながら、思い切りの悪いシュートで同点（8—8）のゴールを逸したが、思い切って射ってきまっていればあるいは後半の守備の乱れを防げたかも知れなかった。

試合後、ザイラー監督は「日本の速攻はすばらしい。また選手を自在に使い、攻撃のきっかけをつくっていた木野のプレーもよかった」といった。たしかに、この日の木野は全日本のコントロールタワーにふさわしく、素早いバックパスなどで、佐藤、村田らの若手を走らせ、さらに機をみては自から切り込んでゴールをあげた。

ともかく前半でみせたような幅のあるゆさぶり、そして速攻をかなめに思い切った攻撃を展開するなら、世界選手権二位（東ドイツ）を十二位（日本）の差は解消され残る二試合をおもしろくするかも知れない？と、見たのは欲目だったろうか……。

エンゲル誕生祝い　第2戦当日、26回目の誕生日を迎えたエンゲル選手に開会式で全日本チームからプレゼントが贈られた。

東ドイツの柱はガンショウ②とラケンマハー⑥両ベテランの絶妙のコンビネーションである。この2人の動きに日本守備陣は崩された

（9月1日・東京・撮影山田真市）

ラケンマハー選手訪問

京都での一戦が彼にとって160回目の公式国際試合。ちょっとやそっとのことでは動じない。

「大同戦も、京都大会も相手のデキがすばらしかった。正直、苦戦だった。でも、なにかのキッカケでこちらがリズムをつかめば必ず逆転できると思っていたし……」

3年前からキャプテンの重責にある。

「自分が手本になるようなプレーを心がけている。

特にピンチに立たされた時はキャプテンのプレーがチームに影響してくる」

今回のシリーズで日本は得意の速攻が不発だった。東ドイツの帰陣が予想以上に早かったからだ。その先頭を切って自陣にかけ戻っていたのは30才の彼である。

ポストプレーの巧さも定評がある。パワー全盛のなかでいぶし銀的存在だ。

「日本は戦術的には、非常によいものを持っている。スピードも申し分ない。しかし、それに頼るばかりでは、世界の上位に食いこめない。もっと変化のある攻撃とスピードを加味したらどうだろう」

この日本観は、これまで来日したヨーロッパ勢とは違う。彼らは、日本の欠点としてパワーの不足、ロングシューターに人の居ないことを必ずあげた。

ラケンマハーにいわせればロングシューターも居るにこしたことはないが、ハンドボールの面白味というのは、「やはりスピード、変化、技巧にある」ということになり「我々のチームを見てくれ」ということになる。

「日本は、その点プレイヤーに敏しょう性があり有望なハズだ」

スタミナを考えて、ザイラー監督も彼を大事に起用している。

「なんとか、モントリオールまで頑張りたい。金メダルを手にして引退するのが夢だ」

すでに10年近いナショナルプレイヤー生活。

「いろいろな国へ行ったが、日本ほどすばらしい所はなかった。

多くの日本人と知りあいになれた思い出を大切にしたい。それに日本のファン」はなんとフェアなんだろう。

彼が日本を気にいったように彼のプレーに酔い、彼の人柄に惚れた日本人も少なくなかったハズである。

1・2戦を観て

技術評・渡辺慶寿

第1、2戦とも東ドイツの快勝に終ったとはいえ、全日本の選手養成・強化において、いくたの〝観戦的資材〟を得たことは、今後の強化に役立つものと考える。

第1戦の前夜、日本の地を踏んだ東ドイツに対して、全日本に勝機あるいは善戦の期待は充分にあった。

過去に私どもが、ミュンヘンオリンピック強化のため、全日本が欧州遠征（44年5～6月）した時その疲労度を調べたことがあるが時差の関係で、少なくとも7～10日間は運動能力及び身体的コンディションに悪い影響のあることを知った。

特に現地到着後3日間は、時差の影響が大であった。

しかし、東ドイツは、強靱な意志と体力によって、それを解決、近い将来ハンドボール史上最強チームを築き上げるであろう東ドイツの意気をはっきりと示した。

全日本は守りの強化育成を最大の目標に、ボディアタックに重点をおいての練習をつみ、その成果を前半に表せ得たことは、今後の強化に参考となる事象であった。

第1戦は、東ドイツが旅疲れとスタミナを考えて、遅いペースを採ったが、要所はさすがに手固く先行した。

全日本は前半なかばに、藤中の中央から防禦陣をさけ、全身を相手に預けてのシュートが決まりはじめ意気をあげた。

前半の2点差は、全日本にとって充分反撃できる射程内にあったのだが、東ドイツの時間経過にともなう穴のない選手層と得点配分はみごとで、結局、全日本は6点差で敗れた。

全日本は、ガンショウを中心とする中央よりやや右からの攻撃を予測した防禦シフトで前半は成功したが、後半の防禦は前半の読みのある早い動きを見せることができずラケンマハーのカットインプレー、ポストプレーにより得点を重ねられた。

第2戦も前日と同様、全日本は前半三本の七米スローの反則をだしながらも、第1戦ではみられなかった佐藤、村田コンビによる「空中攻撃」と佐藤の変化あるシュートによって、得点を重ねることができ、早いよみのある強い防禦策もまとまって東ドイツの攻撃をうまく阻止した。

またこの試合で初めて国際試合を経験した斉藤（GK）が、味方の好防禦に助けられたとはいえ、相手の強力シュートをストップ、彼にとっても自信を得ただろうし、全日本にも大きな〝財産〟となろう。

しかし、後半はやはり東ドイツのペースに誘われ5分8―11、10分9―15、15分9―17と差を開かれた。

特にガンショウのスナップを活かした左腕からの強烈な矢のような速さのシュートは昨年来日したユーゴの選手以上のものがあり驚嘆させられた。

全日本は、後半になると前半のはげしさが欠け、期待していた蒲生のロングシュートも一本にとどまり、東ドイツデイフェンスの当りのある防禦陣の〝強さ〟を再認識させられた。

2戦を通じて目立ったのは日本の被7MTである。1戦、2戦とも各6本をとられ、第1戦は5点第2戦は4点をあげられた。

（以下次号。筆者は日本協会技術部長）

ガンショウ選手訪問

「ライナー・ガンショウだってピッタリの名前だなあ」

小学生ファンが、大発見したようにはしゃいだ。

野球の弾丸ライナーを思わす快速シュート、この子たちにスペルや意味の違いを教えてあげる必要はないだろう。

まさしく〝ライナー〟ガンショウだったのである。

――あなたのシュートのすばらしさに驚いている。特別の練習でも？

「18才まで陸上競技（投てき）とハンドボールをしていた。

陸上の経験が活きているだけで、特別なトレーニングはしていない」

もう12年前の話だが、とことわって、スラスラと自己最高記録を書いてくれた。

やり投げ70m01、円盤投げ45m20、砲丸投げ15m50……。

いずれも17才の時にマークしたという。日本のインター・ハイなら上位に食いこめる。

――なぜハンドボールを

「チームスポーツのほうが楽しいと思ったからだ」

けして長身ではないが、胸の厚味がすごいし、腕はまるで丸太。

ザイラー監督にいわせると本格的シーズンが始まったばかりで「この遠征、彼は必ずしも好コンディシンではなかった」

日本側の徹底的な〝警戒〟にあったこともあるが、全日本戦4試合で15点は思ったほどの大量点ではない。

むしろ、専門家たちを感心させたのは、その配球力である。

単なる〝射ち屋〟ではなかったのだ。

相手チームに対する観察も鋭い。

「日本は、今春の世界選手権よりはるかによかったが、相変らずムダな動きとパスが多いし、プレーが単調で先を読み易い。

前半よいが、後半もろいというのも考えなくてはいけない。」

――日本で目についた選手は

「なんといっても藤中。それに村田、木野。GKはどのチームもよかったが、特に大同の柳川の斗志に感心した」

――今、世界で最高のプレイヤーを選ぶとしたら

「（かなり考えたあげく）GKはルーマニアのペヌ。

FPはユーゴのホルバット（昨秋来日）が総合力で最高、攻撃力だけならビルトラン（ルーマニア）になるかな」

もうすぐ30才、モントリオールまでは、という。

劣えを知らぬスピードと、ますます円熟するであろうテクニック。名人・ガンショウの〝芸域〟はとどまるところを知らず広がりそうな感じた。

（ラケンマハー、ガンショウ、ペーメ（11頁）選手訪問は一宮昌平普及委員に通訳願いました）

大同製鋼大魚釣り落す

残り4分　惜しくも力つきる

第3戦・大同製鋼(愛知)との試合は9月4日午後6時20分から名古屋・愛知県体育館で行われた。審判員＝稲石三二、奥村方志、（観衆四千）

東ドイツ　19（7—8 / 12—10）18　大同製鋼

【大同】		得
GK	柳川兄	0
FP	藤中	3
	加藤	3
	中井	2
	松原	5
	花輪	3
	柳川弟	2
	7MT（2）	18

得	【東ドイツ】	
0	W・シュミット	GK
0	ヴァイス	
1	ガンショウ	FP
1	ヒルデブラント	
5	P・ロスト	
4	ラケンマハー	
1	エンゲル	
2	ケーラー	
0	D・シュミット	
2	J・ロスト	
0	ピーチュ	
3	グルーナー	
19	（15）	

◇その他の出場者【東】GKフォークト（得0）

（後記）

改田　智洋

（朝日新聞社名古屋運動部）

世界2位の東ドイツナショナルチームがやっとの思いで勝った。しかも最後の1分間シュートの意志さえ見せず、ただ勝つために時間を稼せごうとする戦法までとって……。裏返えせばそれだけ大同の出来がよかったし、大同は勝てる試合を落したともいえる。

「ひとあわふかせてやる。負けるとしても5点差以内」中浜監督は一カ月以上も前の七月中旬からこういい続けて来た。ところがたのみのGK柳川清が足首をねんざしたのに続き、八月末にはベテラン野田が盲腸を手術するというアクシデントに襲われた。しかし柳川は痛み止めの注射をうってビッコをひきながらも出場、野田もプレーこそしなかったが、ベンチで細々とした指示を与えた。これがプレーヤーにとって精神的に大きな支えとなっていた。試合後中浜監督は「本当にみんなよくやってくれた。あれだけやれたのもチームワークの良さがあったからだ」といった。

大同は柳川実が東ドイツの中心選手ガンショウにピタっとつき、他のプレーやバスケットのゾーンプレスのようなディフェンスをしいた。しかも激しい当りで早い時点につぶそうとする。「けがをおしてゴールを守っている清の負担を少しでも軽くしてやろう」の気持があるから必死のディフェンスだだから堅かった。両チーム5分間無得点。そして先取点は大同があげた。東ドイツのミスで球を取った藤中が判断よく走った加藤にパス。加藤は中央やや右から一人この速攻に追いついていた東ドイツの選手をかわすように切れ込んでシュートを決めた。そのあと東ドイツに3点連取されたが、7MT2本で追いつき、さらに息のあったコンビネーションプレーで差を広げた。とくに24分、右の中井から中央の藤中へパスさらに左に走り抜ける中井に藤中がバックパス中井が左45度付近から得点したプレーは見事だった。これで6―3帰陣する時、藤中と中井が顔を見」合わせてからはやった。いけるぜというゼスチャーをした。ベンチも他の選手たちもこれに答える。全日本にはないムードだ。ここに「部員全員が兄弟のようなもの」という大同のチームワークのよさを見た。

大同の一歩もゆずらぬ試合ぶりは「勝利」を期待させ観衆をわかせたが惜しくも力つきた。ガンショウ・ラケンマハーらのカゲにかくれているがP・ロストの速攻とポストプレーの巧さは東ドイツ攻撃陣の厚味をいっそう増していた。（撮影・光島磯雄）

東ドイツは全日本と対戦した一二戦ともリードを奪われたことがなかった。それが3点も差をつけられた。さらに立上りの5分間と中盤の13分間、大同の好ディフェンスにあって無得点。彼らにとってこんな経験はほとんどなかったことだろう。それでも前半終了3分ほど前からポストプレーを決めだしどうにか前半は1点差で終った。

後半も大同はいいムードで、リードを保ちながら試合を進めた。しかし10分、藤中が2分間退場、この間に2点を奪われた。しかも11点目は藤中の退場時間が過ぎるのを待つようなパスワークの時、ミスが出て得点されたのだから大きい。

東ドイツはどうしてもリードが奪えないため、15分過ぎ、GKをバイスからフォークトに代えた。バイスも好守を見せていたが、やはりフォークトの方がFPに安心感を与えるようだ。ペースをつかんで追いあげ、18分にP・ロスト

試合経過

・前半5分	大同	1—0
・前半10分	東ド	2—1
・前半15分		3—3
・前半20分	大同	4—3
・前半25分	大同	5—3
・前　半	大同	8—7
・後半5分	大同	9—8
・後半10分	大同	12—9
・後半15分	大同	14—12
・後半20分	東ド	16—14
・後半25分		17—17
・後半28分	東ド	19—17
・終　了	東ド	19—18

のＭＴで追いつき、20分再び７ＭＴを得て、今度はガンショウが決めて逆転した。

このあと大同も二度同点に持ち込むシーソーゲームを展開。さらに2点差をつけられたあとの終了1分20秒前に松原が決めて1点差としたが、東ドイツの1分間逃げ込み作戦にあって涙をのんだ。

終了4分前、柳川実のノーマークのショートが決まっていればといろ惜しい場面もあった。しかし「世界のＧＫをデクの棒にする」といわれるガンショウのシュートをたて続けに2度も防いだＧＫ柳川の活躍、前半27分と後半12分、1点差と迫まられた時、得点してチームに余裕を与えた加藤のプレーなど見るべきものが多かった。だから観衆はおおいにわき、終盤の攻防ではひとつひとつのプレーに盛んな声援がとぶ。ハンドボールで四千人近い観衆がこんなに興奮したのを初めて見た。

"惜敗"にわくロッカー

○……試合終了後の大同控室は、まるで勝ちチームのように、日本協会や地元役員たちが次々に訪れて「いい試合だった」と選手たちの肩をたたき、その健斗をたたえていた。

ほめられれば、ほめられるほど選手たちは、口惜しさがつのるようで、誰も黙りこくる。

精も根もつきはてた選手の輪の中から、顔面を紅潮させた中浜大輔監督が出て、記者団と応対したが、ここでも「あの時のプレーが……」とか「もう少しあそこで……」といった惜しいふり返りばかり。

そういえば、15年前、当時世界2位のルーマニアナショナル（11人制）に16－17と惜敗した全芝浦工大の控室（東京小石川球技場）も、このような雰囲気であった。

女子実業団が前座試合

○……名古屋大会ではブラザー工業(愛知)×日立栃木＝14－4でブラザー＝、京都大会では立石電機(熊本)×日本ビクター(茨城)＝10－8で立石＝と、前座試合に女子有力実業団同士のカードが組まれファンの関心を呼んだ。

4チームとも、茨城国体(10月)に出場が決まっており、絶好の前哨戦。ホットな展開となったが、口の悪い連中は「看板の東ドイツ戦より接戦が期待できるし、面白い」と云っていたが、この声が日本選手に聞こえたのか、名古屋（大同製鋼）、京都（全日本）とも1点差の惜敗。「さすが真打ち」と男(?)をあげた。

ベーメ選手訪問

ハンドボールを本格的に始めたのは18才から。ヨーロッパの一流選手ではめずらしいケース

それから3年後、早くもナショナルプレイヤーになりミュンヘンにも出た。これまた異例の"出世"。

非凡な素質の持ち主、といえるだろう。

将来への期待も大きい。モントリオールで金メダルをとれるかどうか、彼のプレーが一つどのカギといえる。

「金メダル?、とりたいものだあ今年の春(世界選手権)は、まりにデキが悪すぎた」。

ザイラー監督の秘蔵ッ子。同監督がメキシコとキューバへコーチに行った際、お伴を命じられている。

「キューバはまだまだ。ヨーロッパ以外では、なんといったって日本がいちばん強い。」

日本のチームにアドバイスは?

「攻撃はいいと思う。問題はディフェンスだ」。

どうしたらいいだろう?

「いろいろあると思うが、やはり実戦経験を積むことではないか」

スタートの遅かった彼が、日浅くしてナショナル入りできたのは所属クラブがガンショウらを擁するエムポール・ロストックという超一流チーム。「国内1部リーグやクラブ間国際試合で、もまれつづけたからだ」という。

彼の説明によると、エムポール・ロストッククラブには男女25のチームがあり、次のような層に分けられる。

年令、レベルに応じて指導体制がととのえられているのは、なんとも淡しい。

彼も「30才までは1軍で、そのあとはクラブでのんびりハンドボールに親しむつもり」だそうだ。

それだけに「モントリオールではどうしても…」。2年後、26才。正に油が乗り切った時だ。

今回の遠征では、第2戦を終ったあと急に体調をくずし、同行のドクター・ルックから内臓疾患と診断され、ザイラー監督に「帰国命令」をうけた。

「こんなことは初めてだ。京都を観たかったのに……」。一日も早い全快を祈りたい。

◇ロストッククラブの構成

成人	一軍(16名)
成人	その他
ユニオーレン(17～21才)	
ジュニア	(A) (B)
生徒	(A) (B)
児童(8～11才)	(A) (B) (C)

全兵庫善戦及ばず

松岡11ゴールの活躍

余裕示した東ドイツ

第4戦、全兵庫との試合は9月6日午後6時31分から神戸市中央体育館で行われた。審判員＝岡本克彰、狩野幸介（観衆三千）

東ドイツ 40（22―9、18―11）20 全兵庫

【全兵庫】		得
GK 上野	（スワロー兵庫）	0
GK 大谷	（神戸製鋼）	0
FP 畑	（スワロー兵庫）	2
FP 黒田	（スワロー兵庫）	1
FP 笹野	（神戸製鋼）	3
FP 松岡	（スワロー兵庫）	11
FP 井上	（スワロー兵庫）	0
FP 北山	（スワロー兵庫）	0
FP 中村	（スワロー兵庫）	0
FP 若本	（神戸製鋼）	2
FP 橋本	（垂水ク）	0
FP 角谷	（神戸製鋼）	1
	（1）	20

得	【東ドイツ】	
0	フォークト	GK
0	W・シュミット	GK
1	ヒルデブラント	FP
2	ガンショウ	FP
9	ラケンマハー	FP
9	J・ロスト	FP
5	グルーナー	FP
1	ケーラート	FP
4	P・ロスト	FP
3	ピーチュ	FP
0	エンゲル	FP
6	D・シュミット	FP
40	（3）	

7MT

▽この他の出場選手、【兵】▽FP藤田（スワロー兵庫）、工藤（鈴蘭台高）、筏（明石南高）＝いずれも得0、【ド】▽GKヴァイス得0。

〈後記〉

幸田 末之（兵庫県協会理事長）

この大会は兵庫県協会創立25周年記念事業として行われ、県内のトップクラスによる全兵庫が対戦した。チーム編成はスワロー兵庫（全日本教職員3位）を中心に実業団から4名、クラブ1名、高校2名。県民、ハンドボール愛好者ファンの期待の大きさは観覧者数から見てもわかると思う。

戦前から体力・技術ともに格段の差があることは周知であった。ファンの目は世界のトップレベルの〝ハンドボール〟を自分の目でたしかめ、今後ハンドボール競技を行う上で、親しむ上で如何にものにするかに注がれていた。又現代のハンドボール競技に対して再認識をしようとする姿勢を関係者はスタンドの熱気から感じ、受けとめもしたのである。

試合は、東ドイツが、「ナショナルチームとの対戦ではない」という緊張のほぐれから攻守に大たんなプレーを随所に見せたため、勝敗を度外視してファンは存分にこのチームの持つ特色と強味をたんのうしたことと思う。

40対20。つまり、1分に1点の得点、その得点が両軍共に実に内容をともなったプレーによって生み出され、ハンドボールはすばらしいスポーツだ！　と全観衆が強く眼中に収めて帰ったことと思われる。

全兵庫も勝敗にこだわることなく、ベテラン・北山を中心にして、松岡にボールを集め全員がのびのびとプレー、10分4―6、20分7―12と健斗、後半は地力の差があらわれたが、臆せず20点の得点をした。東独では前評判どおり左腕ガンショウのスナップを活かした矢のような速さのシュート、ラケンマハーのポストプレーの動きの機敏さが光り、日本では今後しばらくは登場しないであろう2mプレイヤー・ケーラートのジャンプシュートにも目を見はらされた。またスピード豊かな変化から見せるセットプレー、ブロックプレー、スカイプレーなどハンドボール競技の真随をファンのために展開してくれた。勝敗はともあれ世界のトップクラスのハンドボール競技を目前にしたことによって、県民愛好者へ普及面で充分なる成果を収めたと確信、意義ある大会であったことを終りに記しておきたい。

東欧勢から初の20得点

◎……「40―20」という大乱戦はいろいろな記録を生んだ。

日本で行われた国際試合（7人制）で20点差の敗戦というのはユーゴ35―13三景（48年9月、東京）。中国35―14京都学生選抜（41年9月、京都）に次ぐもの。

両チーム合計60点というのは、ちょっと例がないが、海外に出てとなると西ドイツ38―27日本（計65点、42年1月、世界選手権）というスコアがある。

外国チームに40点を奪われた試合としてはチェコ40―7日本（39年3月、世界選手権）、ソビエト40―10日本（同）など。

全兵庫の名誉のために一つ。東欧の一流ナショナルチームから20点をもぎとった日本チームは全兵庫が史上初。

これまでは44年6月、全日本がユーゴから19点を奪ったのが最高だった。（数字はいずれも男子。本誌調べ）

来年の交流具体化せず

日本協会・荒川清美理事長は9月10日夜、東ドイツ選手団々長R・ハリー氏（東ドイツ協会事務局長）と、来年以降の交流について話しあいを行った。

来年の第2回交流は、日本側が遠征して行われる予定で、荒川理事長は「女子交流」をほのめかしたが、ハリー氏は即答をさけ、10月のIHF総会席上、再会見して検討、その案を両国体協に示すことで一応、意見の一致をみた。

ディフェンスの差が勝負に

第5戦は、全日本との公式国際試合3回戦として9月7日午後2時6分から大阪市中央体育館で行われた。審判員＝安藤純光、佐野和夫、公式計時員＝岡本克彰、公式記録員＝丸岡一清

（観衆四千・満員）

東ドイツ 20（11－9、9－4）13 全日本

得	【東ドイツ】		【日本】	得
0	フォークト	GK	本田	0
0	ヴァイス	GK	斉藤将	0
2	ガンショウ	FP	有永	4
3	グルーナー	FP	木野	1
3	ヒルデブラント	FP	中井	0
0	ケーラート	FP	藤中	1
1	ラケンマハー	FP	菊池	1
2	ピーチュ	FP	蒲生	0
4	J・ロスト	FP	津川	0
2	P・ロスト	FP	佐藤	3
1	エンゲル	FP	村田	2
2	D・シュミット	FP	穂積	1
20	（3）	7MT	（1）	13

（後記）

松本　守正（毎日新聞社大阪運動部）

◇……東ドイツのペースで前半は試合が展開した。立ちあがりの2分、ヒルデブラントがいきなり、強烈なシュートを決めて先制。これですっかり勢いづいた東ドイツは5分にはラケンマハーが決めるなど15分までに5点をあげ優位に立った。全日本は18分、速攻から中井が村田につなぎやっと初得点。このあと木野、有永がむずかしい体勢からシュートして加点したが、東ドイツは速射砲のガンショウを中心に適確なパスワークで着実に引き離した。

◇……タテの動きだけで思うようにパスが通らない全日本は後半にはいって菊池、有永らがポストで積極的な動きをみせ12分には12－10、2点差まで追い上げたが、東ドイツの巧みな守備に全日本のパスが封じられた。

◇……全般的にみるとやはりデフェンスの差が出た感じだ。東ドイツが前半とくに守備に重点を置いたのに対し、全日本は一人一人の動きがバラバラでなかなか足並がそろわない。これにつけ込んだ東ドイツが細かいパスをポストで回しチャンスには積極的にシュートに出た。逆に全日本は相手のシュートモーションにとまどいがち。速いパスが多いため、シュートするのかしないのかの判断がつきにくく苦しんだ。

◇……それにしても東ドイツのシュートはどれもかなりの威力があった。とくに左腕・ガンショウのシュートは、サイドスローからの速射で「直接受けて右手がしびれた」（本田GK）というくらい強烈なもの。さらにガンショウはシュートだけではなく、たえずポストサイドで好位置をマークしリード役でも抜群だった。2mのケーラーは得点こそしなかったが、長身を生かしてのデフェンスはさすがに〃ベルリンの壁〃だけあった。手首が強くなれば相当に伸びる選手。また、ハデさはないが老練らしい動きで全日本の当たりをかわしたラケンマハーの動きも目をひいた。

◇……全日本は村田、菊池らの若手が順調にのびてきている。それにこの試合は全員がよく走った。しかし「全日本は一時間という時間の配分を考えずに、ただ突っ走るだけでは得点にはならない」（ザイラー・コーチ）。全日本としてもあらゆるデーターから十分研究しているが、いざ実戦となると、なかなかむずかしい。

◇……東ドイツ、全日本両チームとも二年後のモントリオールに照準を合わし若手起用に主眼をおいている。だが、東ドイツはガンショウ、全日本は木野といったベテランがまだまだ主軸となって流れをつくっている。竹野監督は「新旧の交代はすぐには出来ない。それにベテランはベテランの味があるので……」といっているが、若手の台頭こそ今後の大きな課題ではないだろうか。

第5戦技術評　村田　弘

東京での全日本との対戦で東ドイツは前半全日本のはげしい防御に合い第1戦は2点、第2戦は1点差と執ように喰いさがられ苦戦したが後半全日本の疲労につけ入り秀れた個人技と組織力で実力を発揮した。全日本との第3戦目は前日全兵庫と対戦し、今日が来日5戦目でやや疲れ気味で特に日本のむし暑さは難敵であった。中5日をおいて満を持す全日本と、1・2戦攻守に活躍したペーメン選手の帰国欠場の東ドイツとどの様なゲームになるか、試合は前半開始直後、突進した菊地がノーマーク気味のシュートをはずし先制の火ぶたを切れなかったのは残念であった。東ドイツは立上り全日本の脚が動かず受身のディフェンスの甘さを鋭くついて15分で5－0と引き離した。全日本はあの手この手と攻撃を繰り返すも歯車がうまくかみ合わずあせる一方であったがやっと17分に佐藤と村田のスカイプレーで得点し、突破口を開いた。その後一進一退が続いた。東ドイツの執念に比べ、全日本はあせり気味で気力を欠くゲーム展開で前半を終了した。

後半に入るや全日本は見違えるように気力を燃やし、思いきって前に出る防御に出たので東ドイツチームにミスが現われそれをうまく攻撃に結び15分には12－10と追いあげ、ムードをもり上げた。ここで東ドイツをつかまえたかに見えたが全日本の防御疲れ、判断力の悪さ、又攻撃、防御のメンバーチェンジの不手際によるコンビの悪さにつけこまれ5点を連取されせっかくの追い上げをふいにしてしまった。

この試合は全日本前半のつまづきがまずい結果となり、すべての面にまさる東ドイツチームの実力発揮で勝敗が決した。全木を通じ防御は東ドイツの攻撃的組織防御とは対象的に全日本は受身でツメが甘くちぐはぐになった、受身になるとどうしても最後に7mスローを取られる危険性がある。全日本の攻撃は中央に集まりすぎと無駄な動きが多くツメに甘さが多かったのとキャッチミスが目立った。

防御技術、フェント技術、速攻スカイプレー、又得点の取れるフォーメイションをまだまだ練習する必要があると思う。

（大阪協会副理事長、元全日本男子監督）

安藤、低野組で審判通す

今回のシリーズのうち、公式戦4戦のレフェリーはいずれも安藤純光、佐野和夫両国際公認審判員が〃通し〃でつとめた。

これは、日本協会初めての試みで「一つの前進」と評価された。

東ドイツ側の反応もおおむね好評。日本審判員の国際舞台登場も間近いのではなかろうか。

日本健斗　東ドイツ、残り4分間で逆転

第6戦（最終戦）は、全日本との公式国際試合4回戦として9月8日午後2時39分から京都府立体育館で行われた。審判員＝佐野和夫、安藤純光、公式計時員＝寺岡紀夫、公式記録員＝西田民夫

（観衆三千）

東ドイツ 17（10―4、7―12）16 全日本

得	【東ドイツ】		【日本】	得
0	ヴァイス	GK	斎藤将	0
0	W・シュミット	GK	本田	0
2	ラケンマハー	FP	中井	2
3	ガンショウ	FP	藤中	3
2	J・ロスト	FP	松原	3
3	P・ロスト	FP	佐藤	3
2	ピーチュ	FP	木野	4
4	グルーナー	FP	有永	0
0	ケーラート	FP	花輪	0
0	D・シュミット	FP	村田	1
0	エンゲル	FP	菊池	0
1	ヒルデブラント	FP	飯田	0
17	（3）	7MT	（3）	16

（後記）　荒川清美（日本協会理事長）

前半の東ドイツは、いつになくプレーに正確さがなく、特に攻撃面では再三シュートをバーに当てたり、そらしたりで、思うようにポイントをあげられなかった。

3連敗の全日本は、このスキをよくついて木野が好判断から積極的に射ちこみリードを奪った。

前半なかばを過ぎても東ドイツは立ちなおりを見せず、日本はますます調子づき、松原の速攻など大同勢をくり出すベンチの策戦もあたって優位をキープした。

前半を見た限り、私は初の勝利をかなり有望と感じた。

それは17分6―4と追いこまれたあと2点をすぐに入れ8―4としたこと、さらに25分に10―5と引きはなし、前半終了直前11―7とされたものの、ノータイムで得た7MTを佐藤が沈着に決めて5点差を守ったことである。

いつもならこうしたケースで、逆転あるいは逆転のきっかけを与えてしまうのが、この日はもちこたえたのである。

問題は後半開始10分間にあるとみた。いくら東ドイツでも5点のハンデは大きいし、まして日本は調子づいている。残り1分々々を大事に運んでくるだろう。それには日本が、守りを固め、連戦でいささかへばり気味の相手に逆襲を断念させる速攻を決める必要があった。

ところが、再開されてみるとこの期待は崩れ、日本は8分13―11と詰められてしまったのである。

守りの綱が切れ、攻撃の歯車がずれてしまっていた。

それでも9分以降取られては取り返す状況で、残り15分3点差があったのだから、勝機は充分あったハズだ。

このあたりから、東ドイツのディフェンスは、はげしい当りを見せはじめた。こんな荒さを持っていたのか、と思わせたほどだ。

もし、このプレーが、必死の反撃の現れであるとしたら、それはヨーロッパの現在の流れを垣間みたにすぎないが、私は、これをザイラー監督一流の策戦であると感じた。

つまり、荒く仕掛けて日本をこのペースに誘いこみ、それまで好調の相手のリズムを断ち切ろうとしたのではなかろうかと。

2日後のレセプションで、ザイラー監督は、この点を明かさなかったが、ラケンマハー主将は「後半なかばから日本に疲れが目立った。だから――」と、暗に体力消耗を狙ったような口ぶりだった。

たしかに、このあたりで日本の動きは鋭さが欠けた。

してやったりとばかり東ドイツは残り10分となるのを待っていたかのように攻勢に転じ、ラケンマハーの得点を口火に、この日大当りのグルーナーで20分15―16と追いあげた。こうなると、1点リードにもかかわらず日本は受け身。

しかも、それまでは前で当っていたディフェンスが次第に後ずさり、第1戦以降の課題とされた彼7MTの危険をともないはじめたのである。

この悪い予感は土たん場であたり、残り4分7MT2本をガンショウに決められ逆転負けとなった。

東ドイツ―日本④
ランニングスコア

前半	東ドイツ	日本
40秒	①J・ロスト	
5分		①中井
6分		②木野
8分		③木野
10分	②ラケンマハー	
11分		④松原
13分		⑤佐藤(7)
14分	③グルーナー	
16分		⑥松原
17分	④グルーナー	
18分		⑦木野
20分		⑧木野
22分	⑤グルーナー	
23分		⑨村田
25分		⑩藤中
27分	⑥P・ロスト	
28分		⑪藤中
29分	⑦J・ロスト	
30分		⑫佐藤(7)
後半		
3分	⑧ピーチュ	
4分		⑬中井
5分	⑨P・ロスト	
7分	⑩ピーチュ	
8分	⑪ヒルデブラント	
9分		⑭松原
10分	⑫ガンショウ(7)	
13分		⑮佐藤(7)
14分	⑬P・ロスト	
16分		⑯藤中
18分	⑭ラケンマハー	
20分	⑮グルーナー	
26分	⑯ガンショウ(7)	
28分	⑰ガンショウ(7)	

東ドイツ戦に拾う

◇……史上初めて一週間に4回ハンドボールのテレビ中継が行われた。NHK1回、民放3回(いずれも全日本戦)であったため、地域によって4回とも映し出された所もあるし2回どまりという所もあったがまさに画期的なこと。ようやくハンドボールが世間に評価されはじめたことを物語るものであった。

解説をつとめた荒川清美氏(東京①、日本協会理事長)、大西武三氏(東京②、前全日本コーチ)村田弘氏(大阪、元全日本監督)小西博喜氏(京都、日本協会技術委員)とも〝四者四様〟で味わいがあったが、とりわけ大西氏と、京都でゲスト出演した井蕪氏(全日本女子監督)の若手2人はユニークな発言で好評だった。

テレビへの〝登場〟に引きかえ新聞各紙の扱いは、アジア大会、野球などに押されてまだまだ。

マスコミ対策は、いぜん課題として残っている。

◇……国際試合で、いつも話題になるのが観客動員。

結論から云えば6試合で延二万二千名を動員、昨秋のユーゴ戦(延二万八百、6試合)をわずかに上廻った数字をマーク。上々の首尾といえた。

注目されたのは、3年ぶりに国際試合の主管を引きうけた東京協会による東京大会。連続2日、全日本が対戦というのは初めての試みだったが、第一日が六分、第二日が五分の入り。東京協会・滝口三郎理事長は「2日目の午前中、台風の影響で強風大雨となったのが痛い。これがなければ、確実に第一日を上廻っただろうに」と残念がった。

相変らずの盛況は名古屋と大阪。特に大阪は立ち見も出るほどの盛況で、一般ファンが目立って多くなったのは嬉しい。

欧州チームを初めて迎えた神戸も前売りに全力を注いだ努力が実ってぎっしり埋まった。

◇……「せっかくの日本遠征だったのに―」。名古屋駅から一行と別れ、一人先に帰国を命じられた若手ナンバーワン、D・ベーメ選手はいかにも淋しそう。

第2戦を終えたあたりから、身体のだるさを訴え、名古屋までは同行したものの、ベッドからはなれられず、首脳陣の判断で帰国となったものだ。

試合に出られなくても、旅をつづけることは――と思うのが日本側だが、ザイラー監督は「プレーできなければ、迷惑をかけるばかり、それに一日も早く治ってもらいたいからだ」とこの強硬措置も当然と云わんばかり。

選手数を減らしてもドクターを必ずチームに同行させるヨーロッパチームの健康管理の厳しさを改めて見たような感じで日本協会役員も〝同情〟から一変〝反省〟しきりだった。

◇……東ドイツの面々をいちばん驚ろかせたのは「むしあついことと、観客が静かなこと」だったらしい。

騒々しいばかりのヨーロッパの試合になれた選手たちには美技の時だけどっと拍手がおこり、あとは静かにプレーを見つめる日本のファンのおとなしさに「いささか調子がくるったよ」(エンゲル選手)。

東ドイツでは、国際試合ともなれば、東ドイツの攻撃中は全観客が手拍子をし、歓声をあげ口笛を吹いて声援する。

この騒ぎには、今春の世界選手権の第1戦で東ドイツと顔を合せた日本選手も度ぎもをぬかれている。

「うるさいことこの上ない。でも羨しい風景です」とは菊池悟(早大)選手の感想だが、たしかに、日本のハンドボールファンは、もっと騒いでよいと思う。

東ドイツ戦に拾う

【カット写真は第1戦。TV カメラがゴール後にせまる】

HONDAは無公害時代のパイオニア!!

《世界のホンダ》を支えるホンダイズムとは
フェアプレイを土台にした“先駆者の精神„
です。先人の追従でなく、あくまでも自らの手で
よりよい製品をより早く世に出すこと………それは
究極的にはスポーツ精神と同じ“自分との闘い„です。

本田技研工業㈱鈴鹿製作所
三重県鈴鹿市平田町1907 ☎<0593>78-1212 〒513

厚く、深い底刻み、フット・ワーク優先の合理シューズ

- 力のロス、横スベリを解消した合理設計で定評高い斜線模様の特殊モールド底。(パテント出願中)
- 厚く、彫りの深い底、中底はユニークな弾性を誇る二重スポンジ・クッション。
- 表布と裏布を離した袋状アッパーで、快適な足沿い、軽快な履き心地。
- ブルー、金茶のカラー・フルなデザイン。
- 要部に革補強。

ハンドベアー
デラックス〈HX〉●サイズ=22.5~29●ブルー・金茶●¥2,800

●全国有名スポーツ品店、百貨店でお求め下さい。

神戸 **ベアー株式会社** 東京

東軍（男子）辛くも逆転勝ち

女子は引き分け

学生東西対抗

学生界のオール・スターによる第24回（女子第6回）全日本学生選抜東西対抗戦は9月15日午後1時30分から名古屋・愛知県体育館で行われた。

男子は、2連勝を狙う西軍が、立ちあがりパスワークの乱れる東軍をついて10分6－0とリードする好スタートだったが東軍は前半なかばに立ち直り、後半2分に逆転一気に主導権を握って押し切った。対戦成績はこれで東軍15勝、西軍9勝。

女子は逆に東軍の先行を、西軍が激しく追いあげる展開となり、西軍は残り3分タイスコアにもちこみ引き分けた。東軍の5連勝は成らず、対戦成績は東軍4勝、西軍1勝（1引分）。観衆約一千。

▽男子

東軍 15（5－8, 10－4）12 西軍

戦評　宇津野年一

東軍は巨漢の蒲生と菊地をベンチに、西軍は最強と目される布陣でスタートを切った。毎年試合開始後にみられる現象の一つに、ニューボールの所為ではないかと思われるキャッチミスが多いが、今回も東軍にそれがみられた。その上、混成チームの欠点といわれるコンビの悪さと動きの堅さも手伝って、約10分間は西軍の独壇場となり、0－6と大きくリードを許した。この間の西軍は、正面のポストシュートがきまったのを皮切りに、山本の巧技、3度の速攻、中馬のフリースローで加点した。東軍のミスに乗じた鮮かな先制攻撃であり、開始後の約10分間とはいえ、凄ましいまでの威力に東軍も顔色なく、西軍の圧勝を感じさせた。しかし、東軍もさる者、西軍が選手交代でわずかに変ったリズムの間隙を衝き、松本が、12分速攻とポストシュートで2点をあげた。次いで7分後から出場していた蒲生が、ワンフェイントから豪快に3点目をきめて試合を盛り上げた。西軍は16分と19分に加点して8－5と前半をリードしたが、私の目には東軍の追い上げを許した一因が、選手交代によるわずかなリズムの狂いのように映った。それは好調の中馬とポストプレーヤーの布垣のベンチ入りから、ポストの動きに乱れが生じ攻撃全体のリズムを崩したことにあった。

さらに後半の西軍は、メンバーを一新してリードを守り、引き離す作戦が裏目に出たのは一つの問題を残したようである。それは10分間に9－10と逆転されたことである。後半に望みを托した東軍が速い動きと個人技がチームプレーにマッチし、リズムが元に戻らなかった西軍を圧倒した感があり、42分後の約12分間に5点を加えて勝利を不勝にした。盛り上がった一戦ではあったが、東西対抗なるが故の選手起用から、西軍が竜頭蛇尾に終ったことに、わずかな不満を抱かせた一戦でもあった。

▽女子

東軍 6（4－2, 2－4）6 西軍
引き分け

戦評　宇津野年一

東軍有利の下馬評の裡で、西軍の奮起が期待された。東軍が松本と長身坂本を中心に、快足西田と寺尾などで不動のメンバーでスタート。対する西軍は、小柄ではあるが動きの速い浦崎をトップに、中央を長身者で固めた。

開始後は、個人ミスが目立って得点できず、先取点は4分になって西軍の浦崎が左サイドからドリブルで進み虚を衝いて放ったジャンプシュートであった。この1点はミスを続けて調子の出ない東軍を圧し、西軍の志気を鼓舞するに効果十分であった。

しかし、東軍は6分と11分に坂本がロングをきめて逆転した。西軍はここで同点とする7MTを落したのが痛く、逆に16分寺尾にポストシュートをきめられて点差をつけた。

後半西軍は奮起して28分～35分の間に3点を連取して逆にリードを奪った。追う立場に回った東軍は、40分岩本が7MTをきめて同点、45分足の負傷で十分でない坂本が6点目をあげて逃げ切るかにみえたが、西軍も47分三輪が同点のシュートをきめて引き分けに持ち込んだ。

西軍の善戦が称えられる一戦であった。特に、GK佐々木の好守が西軍を盛り上げた。

全般的には、個人技の不足、特に、パスプレーが緩慢であったことが、ハンドボールの妙味を阻害した感が強い。これは小柄な女子選手にはむずかしいことかも知れないが、ボールを握ることの意義を再認識し、大きなパスモーションがパスプレーを遅らせることの一因であることを反省し、より速いパスプレーと動き全体のスピード化を習得するよう今後の課題として努力してもらいたい。（試合時間の標示は、原文にしたがい通算タイム）

得	【東軍】	〔男〕	【西軍】	得
0	柴田（中央）	GK	小畠（九州産大）	0
0	山田（早稲田）	GK	藤井（大阪体大）	0
6	松本（中央）	FP	山内（大阪体大）	0
0	菊池（早稲田）	FP	布垣（中京）	2
0	上村（中央）	FP	山木（名城）	1
0	佐野（中央）	FP	佐藤（名城）	2
1	脇若（早稲田）	FP	中馬（九州産大）	4
1	蒲生（中央）	FP	宇尾野（大阪体大）	0
2	村田（法政）	FP	藤田（大阪体大）	0
5	菅野（日松）	FP	大原（京都産大）	2
0	松下（中央）	FP	田中（名城）	0
0	玉村（金沢工大）	（審・浅野 奥村）	根本（大阪体大）	0
0	大熊（中央）		能波（大阪体大）	0
0	永元（旭川教大）		矢辺（大阪体大）	1
0	若生（東北学院）		久保（九州産大）	0
15	（1）	7MT	（2）	12

得	【東軍】	〔女〕	【西軍】	得
0	鍋田（東女体）	GK	佐々木（中京）	0
0	長谷川（日体）	GK	梅谷（大阪体大）	0
0	松本（日体）	FP	山木（大阪体大）	0
0	西田（東女体）	FP	高木（大阪体大）	1
0	山田（東京学芸）	FP	寺尾（武庫川女）	2
0	山南（東女体）	FP	辻（武庫川女）	0
4	坂本（日体）	FP	浦崎（中京）	2
0	菅井（日体）	FP	永井（岐阜大）	0
1	寺尾（日体）	FP	久家（中京女）	0
1	岩本（日体）	FP	奥野（大阪体大）	0
0	野口（東女体）	（審・小林 西川）	金森（大阪体大）	0
0	永沢（東京学芸）		三輪（武庫川女）	1
			松本（大阪体大）	0
			花ケ崎（山口大）	0
			沢田（武庫川女）	0
6	（1）	7MT	（1）	6

宇部高専（山口）初代優勝校に

全国高専大会

初の全国高専選手権が8月28、29の両日、新潟県・柏崎市球技場を主会場にして開かれた。

参加したのは全国14都府県から16校、現在、全国の高専64校のうちハンドボール部を置いているのは32校といわれ、その半数が集ったことになる。盛会といえた。

内容的にも、初大会とは思えぬほどの高レベルを示し、上位校はインター・カレッジ（全日本学生選手権）に推せるほど、というコートサイドの声もあった。

ベストエイトは西地区勢が6校を占め、決勝は、宇部高専（山口）×大阪府立高専の顔合わせから、キャリアに優る宇部が、前半に主導権を握り、後半も秀れた攻撃力で押しまくって栄冠を手にした。

来年の大会は、8月愛知県下で行われる予定。

▽1回戦

一関高専（岩手）13（6－4、7－5）9 豊田高専（愛知）

高知高専（高知）13（4－3、5－6、延長 1－0、3－1）10 福井高専（福井）

大阪府立高専 20（8－5、12－8）13 育英高専（東京）

茨城高専（茨城）14（7－6、7－6）12 鈴鹿高専（三重）

鳥羽商船（三重）16（9－6、7－9）15 桐蔭学園（神奈川）

明石高専（兵庫）23（12－2、11－3）5 東京高専（東京）

秋田高専（秋田）16（7－7、9－7）14 富山高専（富山）

宇部高専（山口）17（8－6、9－6）12 長岡高専（新潟）

▽準々決勝

高知高専 21（8－5、13－4）9 一関高専

大阪府立高専 26（12－2、14－3）5 茨城高専

明石高専 27（13－10、14－6）16 鳥羽商船

宇部高専 28（12－3、16－5）8 秋田高専

▽準決勝

大阪府立高専 15（7－6、8－1）7 高知高専

得	【大阪】		【高知】	得
0	日野田	GK	池田	0
0	渡辺	GK	中谷	0
5	清水	FP	神谷	0
0	清原	FP	坂田	1
5	〃渡	FP	田辺	2
0	中尾	FP	西川	3
0	小田	FP	金尾	1
3	仲井	FP	大石	0
1	春山	FP	武市	0
1	尾野	FP	楢尾	0
0	利川	FP	北原	0

15（1）7MT（1）7

宇部高専 18（10－3、8－8）11 明石高専

得	【宇部】		【明石】	得
0	富岡	GK	長田	0
0	白井	GK	西村	0
2	樋口	FP	山本	4
2	高杉	FP	橋本	6
5	荒川	FP	筒井	0
0	重広	FP	紫田	0
0	城崎	FP	西川	0
7	大田	FP	池脇	0
0	有安	FP	小高	0
2	藤井	FP	井上	0
0	林	FP	柚木園	1
0	田中	FP		

18（2）7MT（3）11

▽決勝

宇部高専 24（9－5、15－4）9 大阪府立高専

得	【宇部】		【大阪】	得
0	富岡	GK	日野田	0
0	白井	GK	渡辺	0
4	樋口	FP	清水	4
2	高杉	FP	清原	0
9	荒川	FP	〃渡	3
0	重広	FP	中尾	0
1	城崎	FP	小田	0
6	大田	FP	仲井	1
0	有安	FP	春山	1
2	藤井	FP	尾野	0
0	林	FP	利川	0
0	田中	FP		

24（4）7MT（1）9

○……準決勝・大阪×高知。前半は一進一退の好内容だったが23分清水のゴールでリード、余裕の出た大阪は後半、全選手の好走でチャンスをつかみ高知を圧した。

宇部×明石。事実上の決勝という前評判だったが、フタをあけてみると宇部の多彩な攻撃に明石のディフェンスがつききれず、20分と宇部がリード。後半、明石は橋本、山本のコンビを中心に14分9－15と盛り返したのだが、大阪も攻撃の手をゆるめず押し切った。

○……決勝戦はチームの総合力の差が出た。

大阪は1分先行したが、宇部はすぐ大田の連続ゴールで逆転、その後もコンビネーションのとれた攻撃で加点、単調な大阪をしだいに引きはなした。

後半になるとほとんど一方的な差となり、宇部は会心の試合運びで、初の高専チャンピオンとなった。

大阪は準決勝までの走りを見せることができず敗退。

5年制の特色活かす

～部歴12年の宇部高専～

▽……どこも自分のチーム以外の力は未知数、それだけに全チームに〝優勝のチャンス〟があった。

勝負の岐れ目はキャリアの深浅さにかかるのではないか、という関係者の予想どおり、初代チャンピオンの栄光は、部歴12年を誇る宇部高専（山口）の頭上に輝やいた。

▽……同校は高専1期校といわれる昭和37年の創立、ハンドボール部は翌年早くもスタートしている。

ちょうどこの年山口国体が開かれ、ハンドボールの県内レベルが高かったことが創設の導火線だったが、初代監督の中山克彦さん、41年からバトンを受け継いだ現監督・富樫栄さんという熱心な指導者の居たことが何より大きい。

▽……入部してくる者は、ほとんどが初心者。

しかも、練習相手、試合相手に恵れぬというハンデをのりこえてつねに20～25人の部員をかかえているというのは、好指導の賜である。

かつて山口クや山口教員団で鳴らした富樫監督は「県大会などで一般チームと対等に戦えることをつねに目標としていました。5年制という高専の特色をフルに活かして、5年で一人前という指導計画が一応成果をあげている、といってよいでしょう」という。

▽……3年以下のチームだと、高校チームにころころ負けるが、4年生、5年生を加えたチームでは中四国学連のA級校を打ち負かすほどの力を示せるそうだ。

この〝事実〟は他の参加校にも大きな励みになったようである。

これまで、一般に伍して県選手権や県民体育大会で優勝も飾っているし、中国（一般）選手権では6年前、ベストフォアに勝ち残っている。今回の優勝は、当然の結果ともいえよう。

▽……富樫監督は「他地区のレベルは思ったより低かったが、体格に恵れた選手が多いのには驚きました。二～三年先には大会内容も大いに向上するでしょう。

そのためには、日本協会がすべての面でこの大会を援助して欲しいものです」といっている。日本ハンドボール界も、この新しい仲間が、大きく育つようブロック大会の促進などを後援すべきだろう。

初の教員養成大学研修会開く

かねてからその実現を期待されていた全国教員養成大学ハンドボール研修会が初めて開かれ、盛会のうちに144名の受講者に修了証が渡された

昭和49年度全国教員養成大学ハンドボール研修会は、要項通り8月29日から9月1日まで、3泊4日の日程で、東京オリンピック記念青少年総合センターに於いて行われ、全国18大学144名の学生が参加した。（予定では160名、当日16名が欠席）

実施に先立って8月28日午前10時から関係役員の最終的打合せと準備を行った。その間、早くも来講する大学があり、あわただしいスタートであった。しかも、28日中に半数以上の入所があり、受講生の意欲を開講前にしてうかがえたのは嬉しかった。

◇

＜第1日・8月29日＞　8時30分～9時15分　人員確認、資料配布　9時15分～9時50分　オリエンテーション「総合センター利用について」「諸施設の案内と利用」「諸行事への参加などにつき説明」　9時50分～10時5分、開講式（司会、宮本西嗣日本協会普及部長）＝あいさつ・的場益雄実行委副委員長、祝辞・望月健一文部省スポーツ課長、10時10分～10時50分　特別講演1「スポーツ行政」望月課長

講演要旨　現行の我が国のスポーツ行政機構を説明後、スポーツの実践は、場所と行なう者と指導者が揃えば可能である。

我が国の体育施設は15万カ所だが、この内70％は学校関係のものだ。しかし、従来のように学校体育の分野のみに依存して、スポーツ行政は今後は行なえまい。

余暇善用のため、スポーツを好む国民にすることが大切だ。

今後の体育行政に若い指導者の多彩な活躍を期待したい。

体育行政の重点方針として次の3点がある。

・市、町、村の体育指導者養成
・スポーツ教室の育成、開設
・地域スポーツ指定都市の設定（施設の充実、指導者の養成、スポーツの普及）

10時50分～12時特別講演Ⅱ「スポーツと人生」、神田順治氏（スポーツ評論家）

講演要旨　自分が東大野球部員の時、天野貞祐氏の「学生に与える書」のスポーツと人生の章を読み、スポーツに生きる意義を見出した。スポーツを行う場合、人間である以上、すべては同じ条件だ。

練習など苦しい体験を通して楽しさを知ることは人生にとって尊いものである。一般的にスポーツが普及している国はモラルが高いといわれる。それは社会的環境への順応、対人関係、ルールの順安などをスポーツを通して体得しているからである。

大学スポーツは時間に制約されることもあろうが「練習―常善」を心がけ、よい指導者となられたい。知識は学問から、人格はスポーツから、というのが私の生きかたである。

13時15分～17時　実技①・基本練習、4グループ(班)に分け、日本ハンドボール協会編「テキストブック」8頁の内容で実施。

競技指導主任、高橋健夫、A班指導者　渡辺慶寿、B班指導者　北井晴次、C班指導者　藤原侑、D班指導者　大西武三。

夜は19時から2時間、16㎜フィルム「日本対ユーゴ戦」（NHK制作）を渡辺慶寿、山口毅両氏の担当で鑑賞

＜第2日・8月30日＞8時30分～9時30分、講議「ハンドボールの技術史」的場益雄氏（全日本教職員連盟副会長）　9時35分～10時30分　講議「審判技術について」安藤純光氏（日本協会審判部長）　11時～12時30分、実技②・技術研修前日の基本練習に審判指導を加える。さらに4グループ(班)により実戦形式からの研修を行う。

競技指導　A班・渡辺慶寿、B班・高橋健夫、C班・藤原侑、D班・大西武三

審判指導　A班・宇津野年一、B班・藤田信義、C班・安藤純光、D班・佐々木茂喜

夜は17時から16㎜フイルム、VTRなどによる「ミュンヘンオリンピックのハンドボール技術」を鑑賞

＜第3日・8月31日＞9時～12時40分　実技③・技術研修(実戦)。

競技、審判指導を前日同ように行い、競技(勝敗)的興味をおこすため、前日の試合成績で組み合せを決定、当初はリーグ戦を予定したが、雨模様のためトーナメントに変更して実施。

午後は、東京体育館における「日本×東ドイツ国際親善試合」（東ドイツ17―11全日本）を見学

＜第4日・9月1日＞8時45分～9時25分　講議「ハンドボール界

の展望」荒川清美氏（日本協会理事長）、9時35分～10時45分、反省協議会（司会、的場副委員長）

参加各校の代表者により、それぞれの大学ハンドボールの現況と練習などについて発表、このあと技術指導についてのまとめを渡辺慶寿、大西武三両氏により、審判指導についてのまとめを宇津野年一、安藤純光両氏により行った。

10時50分から修了式（司会、宮本普及部長）＝修了証授与、閉講のあいさつ、荒川清美氏、

◇

第1回とあって運営面、研修内容において今後検討しなければならない問題点は数多くあったが、研修生の意欲、各委員の積極的な協力により成功裡に終了、大きな実績を残すことができた。

研修生の多くも、非常に喜んで帰途についたようだし、今後も永く継続されることを望んでいるようである。

報告　宮木　西嗣
　　　三浦　公
　　　香積　見一

研修会に参加して　受講生の感想文から

▽審判技術の講議など本を読めばすむことであり、実践的に体で覚える研修、指導が欲しかった。

この研修会を開く目的の根底にハンドボールを普及させようとするならば、本部役員が積極的に地方へ出かけ、各地で、このような基礎を指導する講習会を開くべきだろう（古館英彦・岩手大）

▽プログラムの割に日程がきつかった。技術研修の〝試合〟にしても時間不足であり、しかもコートの不整備は、思い切ったプレーができなかった。審判技術の指導もあまりにも短時間すぎたし、すべての面で関東、関西と地方との隔差を感じ、異質の球技をしているのではないか、とさえ思えた。

（佐藤道郎・宮城教大）

▽いかに生徒、学生にハンドボールを教えるか。基本の正しい指導実戦におけるレフエリング等の適切な〝教育〟を期待したのだが、あまりにもその内容が断片的で、系統だてたものがなかった。

さらに印象を悪くしたのはコートのひどさ、そこで試合をさせて順位を決めるなんて無意味だったのでは……。（柏倉正美・山形大）

▽主目的が指導者養成なのか、審判技術なのか、試合なのかはっきりしなかった。前者ならば、もう少し練習方法や技術向上のためのプログラムが多いほうがよい。

実戦で研修を行おうとしたのはよかったが、時間が短かく、コートが狭いとあっては「実」はあまりあがらない（内記英夫・東京学芸大）

▽内容が沢山ありすぎ、研修の目的、焦点がぼけた。試合を行っても勝敗にこだわる指導は必要がないし、審判をさせた場合、ジャッジが不明確なようなケースはその場々で指導と解説をする試みが必要ではないか。

大学最後の年に、研修の機会を与えて下さったことには感謝している（山内正道・愛知教大）

▽チーム（6人）におけるオフェンス、ディフェンスなどもう少し詳しい指導、解説が欲しかった。このあたりが今我々の知識でいちばん不足している点だ。

審判技術の講習はよかった。また映画や講演もそれなりに意義はあったと思うが、ただ見せるだけ聞かせるだけに終ってはもったいないと思う（吉村剛志・京都教大）

▽関係者の熱意を感じとれる催しだった。卒直のところ僕（1年）には難解な指導も多かったのだが、ともかく理論だけはつめこんで帰ることができそうだ。

このような研修会が限られた範囲を対象にするのではなく、各地を巡回して開かれたら、ハンドボールの認識をいっそう高められると思う（藤原弘之・大阪教大）

▽最初の研修会に出席できて嬉しかった。技術論はかなり難しい指導もあり、時間の不足を感じた。

一般論についても、あまりにも抽象的で、バラバラな印象をうけた。すべてにもう少しゆとりが欲しい。我々の学校には監督、コーチが居ないため、このような催しは大いにプラスであった。継続を期待する（鈴木晃夫・三重大）

▽過密スケジュールのため個人同士、チーム同志で話し合う時間がなかったのは残念。実戦をモデルにしての指導は、終局は勝敗にとらわれすぎて、試合そのものの反省や指適になってしまう。

主旨として、ハンドボールを識るということがあったが問題意識をもって話し合うまでに至らなかった。（中森雅彦・広島大）

▽ただ与えられた試合をなんということなく消化し、順位をつける。研修会ではなくこれでは大会だ。

映画にしても、TVの再生で新鮮味がなく、しかも、技術的解説もなかった。よかったのは東ドイツ戦の見学。好試合を見る機会の少ない地方在住者にとって、これはなによりのテキストであった。

（石原　秀樹・福岡教大）

▽8月末の実施をせめて中旬に繰りあげてもらいたい。今回は大学の学業にかかってしまった。

本土の大学チームのレベルをある程度知ったし、指導者としての気持ちも固めることができた。国際試合を見る機会に恵まれたことにも満足している。ただ、いかにも日程が短かく、つめこみ的であった。

（平良了・琉球大）

日本のハンドボールを世界の最高峰へ!

（協賛者御方名・順不同）

三菱レイヨン株式会社	(株) 神戸製鋼所 神戸市葺合区脇浜町1丁目3番18号 電話 (078) 251—1551番(大代表)
京都府ハンドボール協会 会長 木下彌三郎	上田茂行
杏林会 金岡病院 堺市中長尾町2丁82 TEL 0722—52—2461 (代)	中川石油株式会社 盛岡市菜園1丁目7番17号 電話 (0196) 23—(代)3241〒020
東京 渋谷 株式会社 村田自動車工場 東京都渋谷区神宮前6—19—20 TEL 03—407—3731 (代)	水谷印刷所 三重県三重郡朝日町縄生628番地 TEL (059377) 2 5 2 5
大福砿油株式会社 大阪市福島区堂島浜通4—26 TEL 06—451—7271	塩山病院 山梨県塩山市上於曽 TEL055333—2029
大分県ハンドボール協会々長 脇屋長可（わきやながよし） 脇屋ながよし事務所 大分県別府市中央町9—12 TEL(23)6737 (22) 1421	茨城トヨペット 取締役社長 幡谷祐一 〒310 水戸市千波町2028—1 TEL41—1111(大代表)
日新製鋼株式会社呉製鉄所 呉市昭和通7丁目 郵便番号737 電話 (0823) 24—1111 (代表)	山梨県ハンドボール協会 会長 中村太郎
割ぽう「新らく」 東京都港区新橋4—18—14 TEL03—(431) 1661代表	球技用品，服装，其の他全般スポーツ用品 北山スポーツ 明石市本町二丁目1の11（明淡国道魚棚筋西入） TEL078—918—3222
平岡歯科医院 院長 平岡治雄 大阪市西区江戸堀北通り2—3 新坂ビル内 TEL 06—441—4705	東北マッチ株式会社 盛岡市厨川字穴持90 電話 (0196) 47—1161〒120—01
不動産の カントラ（フドウサン） 大阪・堺 TEL 0722—33—0003 0722—22—2103	(株) コーベツーリスト 神戸市生田区元町通7丁目18—1 TEL (078) 371—0080

この広告に関するお問合せは日本ハンドボール協会へ

すべての面に向上のあと

第3回全国中学生大会回顧

岡本 克彰
（大会審判長）

第3回全国中学生大会は8月18日、19日奈良市（中央体育館、正強高体育館）に全国から男女20チームが参加して行われた。（＝記録のみ本誌既報）

開会式において、日本協会・田村止衛会長は「どこの国でも若いエネルギーが先輩を追い抜いていている。この中学生大会の成果が日本ハンドボール界の将来を占うことになる。

歴史の都奈良で、ハンドボールを通じて人間関係の育英を目指して欲しい。健斗を期待する」と激励した。

参加チームは、年々激しさ、厳しさを加えていくブロックの予選を勝ち抜いてきた、とあって、精鋭と呼ぶにふさわしいたくましさを感じさせた。

主会場に予定していた天理市の県立添上高グランドが雨でコンデイション不良となり、雨天用の会場に変更されて、日程は進行されたが、宿舎、会場とも古都らしい雰囲気に包まれ、選手たちには好評だった。

地元で全国大会を開くのは初めて、熱意にあふれた関係役員の諸準備も万全で、特に、宿泊費に関しては、格安にお世話いただいたことは。参加者から大いに感謝をうけた。この場からもそのご苦労にお礼を申しあげたい。

競技面、技術面でもすばらしい向上を示し、男女ともベストフォアの実力は高く評価することができる。

ラフプレーもほとんどなく、若さにあふれた活気のある試合の連続は「中学ハンドボール界」の発展を約束させるに充分。とりわけコートマナーのよさは、指導者の努力の表れで、大会の目標は十二分に達成することができた。

父母たちの応援も競技場はもちろんのこと、宿舎においても細かい点に気をくばり、コンデイション調整など、ほほえましい風景が各所でみられ、「家族ぐるみのハンドボール」が、この大会を通じて育ちつつあることに注目したい。

こうした競技者側の情熱は年ごとに高まり、今後ますます伸びていくであろうが、それにつれて運営面でいくつかの課題が生じているのも事実である。

ことに、参加校数が、第1回（昭47）以来、男女とも各10校（各ブロックと開催地代表）に制限されている点は、再考の時期に来ていると思う。

参加校数を増やすことは、試合数の増加につながり、炎天下中学生の体力を考えると、必ずしも多いのが最善ではない、という考えも判るが、16校に増やし4日間となっても、1日1試合なら、今の中学生、そう過酷とは思えない。

チーム構成を15名（現在は12名）に増やすことによっても、カバーできるだろう。

そして、チーム数（中学人口）を多くするためには、やはり将来は47都道府県から各1チームの代表を集めるのがよいと思う。

また、中学校（生）ハンドボールの組織を確立、強化することも必要で、それによってますます〝中学ハンドボール界〟は安定したものとなる。

（了）

〃〃〃〃 全日本男女、10月13日に発表 〃〃〃〃

日本協会は、9月14日の月例常務理事会で、技術部から提案のあった49年度ナショナルチーム（男女）の選考について協議、10月初旬に男女コーチングスタッフによりリストアップ、10月13日の全国会議（東京）へ提出することになった。この会議で承認されれば即日発表される。

IHF総会へ荒川理事長

日本協会は9月14日の月例常務理事会で、10月4、5の両日イタリアのジェスロで開かれる第15回IHF（国際ハンドボール連盟）総会へ荒川清美理事長を派遣することに決めた。

同総会には、荒川理事長のほか渡辺和美副会長（IHF理事）が出席する。

竹野、東両氏が参加 トレーナーシンポジウム

第3回IHFトレーナーシンポジウムが9月15日からスイスのマクリンゲンで開かれたが、日本から竹野奉昭（全日本男子監督）、東嘉伸（同コーチ）の両氏が参加した。

このシンポジウムは4年にいちど開かれ、受講者はIHF加盟国のナショナルチーム監督またはそれに準ずる者に限られている。今回は、竹野氏にIHF推せん者として招へい状が送られて来ており、その他の参加者については男女ナショナルチームコーチングスタッフ内の話しあいで、東氏が自費参加を申し出、決まったもの。両氏は9月30日帰国の予定。

国際交流事業委決まる

日本協会は、多面な国際問題と予想されるアジアハンドボール界の新局面などに対しょするため、執行部内に「国際交流事業委員会」を設置、次の6理事を委員に決めた。荒川清美（委員長）、泉正明、大野金一、嶋田新太郎、杉山茂、滝口三郎

世界学生出場決まる

全日本学連の藤松博会長代行、中沢重夫理事長らは、9月21日体協で、日本協会・荒川清美理事長と会い、来年1月ルーマニアで開かれる第6回世界学生選手権（男子のみ）に、全日本学連の代表役員4、選手16名を派遣することになった旨を報告した。

この大会はFISU（国際学生スポーツ連合）事業の一つで、日本が参加するのは第1回（昭38）以来のこと。

10月13日に全国会議

日本協会は、10月13日東京岸記念体育会館で全国評議員会、同理事会を開くことになり、9月20日付で招集した。

現行システム最後の大会
茨城国体（水海道市）近づく

現行制度による最後の大会、第29回国民体育大会ハンドボール競技が、10月21日から25日まで茨城県水海道市・水海道一高球技場を主会場にして行われる。

国体は、明年から年令別を採り入れるため昭和23年以降つづけてきた現在のシステム（注、教員は38年以降）は、今年で打ち切られる。

組み合せをみながら優勝の行方や話題を探ってみた。（編集部）

高校男子

強力布陣の福岡選抜

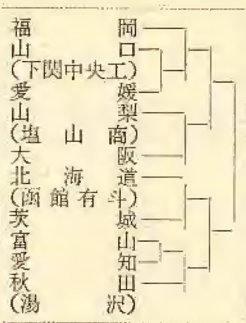
（10チームによるトーナメント）インターハイで優勝の久留米工と同2位の小倉西による福岡（選抜）を優勝最有力候補にあげるのが順当だろう。

他県の監督たちは「福岡は別格」といいながら「1、2位のチームで固めたのだから拙い試合はできない」という福岡のプレッシャーがつけこむスキだともみている。

選抜では富山、茨城、単独では秋田（湯沢）、山口（下関中央工）に期待がかけられよう。

ダークホースは愛媛と愛知（ともに選抜）。

激戦の関東を突き抜けて来た山梨（塩山商）も上り坂で侮れぬ。



高校女子

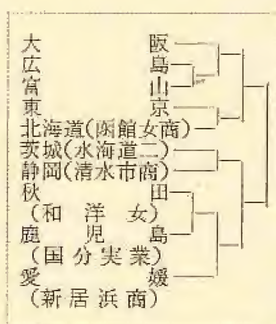
大阪中心の大混戦か

（10チームによるトーナメント）昨年の石川（小松市女）のような抜群のチームが見られず、インターハイ同よう混戦になりそう。

Aパートは大谷主力の大阪（選抜）が一応有利とみられるが、広島（選抜）戦が大きなヤマになる。

Bパートは抽せんのいたずらですべて単独。インターハイ2位の新居浜商による愛媛を中心として和洋の秋田、清水市商の静岡が虎視たんたん。国分実の鹿児島も無気味だ。文字どおりの地元・水海道二（茨城）は夏以後の強化でたくましさを増したと伝えられている。

勝負強い東京（選抜）が波にのると最大のダークホース。



一般女子

有力な地元日本ビクター

（12チームによるトーナメント）例年どおり実業団の強豪がズラリと顔を揃え激しい優勝争いを演じる。

7月の全日本実業団選手権の成績からみて、東京（東京重機）、三重（田村紡）、茨城（日本ビクター）の準決勝進出はよほどのことがない限り固そうだ。問題は熊本（立石電機）に愛知（ブラザー工業）×福島（東北ムネカタ）の勝者が挑む一戦。

便宜上、チーム名で書くが、ブラザーの全日本実業団選手権は悪すぎた（最下位）。その後、思い切った若手起用で上り調子となり、ムネカタはもちろん、立石も軽視は許されない。

立石はまだ「大洋時代」の冴えを取り戻していず不安定だが、ここらで気勢をあげたいところ。

ただ、このパートでどこが勝ち進んでも、地元の希望を一身に集める日本ビクターには一歩をゆずりそう。

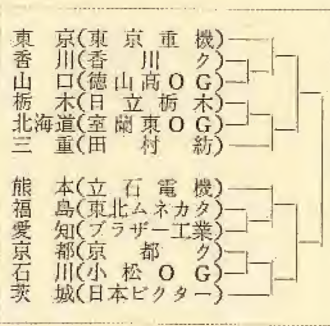
となると、栄冠には、東京重機×田村紡の勝者と日本ビクターが最短距離。

なかでもビクターは得意の速攻のほかセットにも進境を見せて最有力。

日立栃木はどうにか自信を取り戻しはじめたようだが、田村紡、重機と続く壁は厚い。

クラブ勢では、昨年の高校チャンピオンのメンバーによる石川（小松OG）が注目される。〝一発〟を狙って登場してくると、基礎があるだけに面白い。

そのほかでは山口（徳山高OG）の粘り、近畿を勝ち抜いた京都（京都ク）か。



一般男子

今年もやはり実業団勢

しのぎ削る大同、湧永、三景

(30チームによるトーナメント)、シードされた愛知(大同製鋼)、大阪(湧永薬品)、三重(本田技研)、東京(三景)が中心。

この一角に食いこもうとするのが埼玉(大崎電気)×愛媛(住友化学菊本)の勝者、広島(三菱レ大竹)といった実業団勢。

東ドイツを手こずらせた愛知・大同の勢いは、4冠にばく進中の昨年と変わらないところまで盛り上ってきた。ナンバー・ワン藤中の巧技は、今大会のハイライトといってもよいのではなかろうか。

準決勝でぶつかるとみられる三重・本田は、好調時にぶつかれば大同もたじろぎそうだが、相変らず波の多い試合ぶりで危つかしい。

自衛隊勝田による茨城が、準々決勝で、あわよくばと狙っているのもマークしなければいけない。

東京・三景×大阪・湧永は大激戦を期待できる。三景は初の実業団リーグ優勝を、湧永のために坐折させられており(6月)雪じょくしたいだろう。

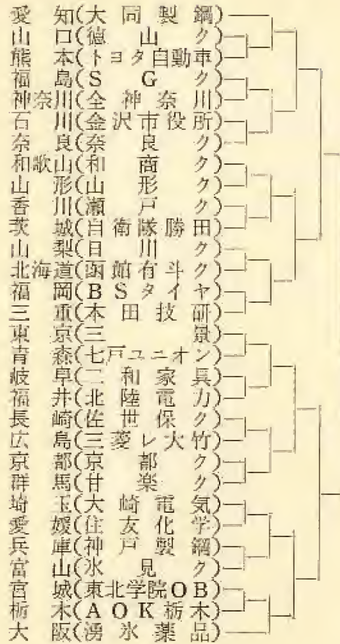
湧永も、このまま進むと、再び大同に全タイトル独占を許してしまいそうで「決勝へ出てたたこう」という大目標がある。そのためには三景戦をどうしても勝ちとらなければならぬ。

埼玉、愛媛は立ち直りを企りたいところだし、広島も一本勝負だけに波乱をおこす可能性を持つ。

このほかでは石川(金沢市役所)、岐阜(二和家具)、兵庫(神戸製鋼)、熊本(トヨタ自動車)、福岡(ブリジストンタイヤ)らの実業団、青森(七戸ユニオン)、富山(氷見ク)、栃木(AOK栃木)、神奈川(全神奈川)、京都(京都ク)、奈良(奈良ク)、山口(徳山ク)、長崎(佐世保ク)らのクラブ勢が上位を狙う力をもっている。

クラブの関係者に聞くと「優勝争いは実業団という〝既定の事実〟があるし、国体はいまや参加するのが第一の意義ですよ」などというが、ブロック予選を勝ち抜こうとする時の意欲が出れば、本大会もけして難壁ばかりではないハズだ。

ブロック予選前は、練習をかなり積むが、そこを通り抜けると、あまり盛りあがりを見せない、といった声も耳にするが、もしそうしたクラブがあるとすれば、熱心ならクラブに対して大変失礼な話だと思う。奮起を待ちたい。



教員

動かない大阪×茨城の決勝

(10チームによるトーナメント)。大阪(大阪イーグルス)×茨城の決勝とみてまず間違いない。

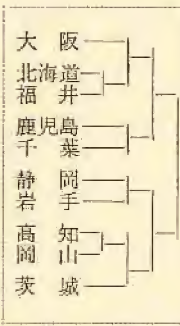
両者は、8月の全日本教職員選手権で対戦、20—13で大阪が勝っている。

ただ、茨城のその後の練習量を考えると、このスコアを今回そのまま当てはめることはできないようだ。

大阪の武器はなんといっても全員のもつ展開力。せりあいになればなるほど、これは活きてくる。

茨城の特色は若さ、速さといってよいだろう。リズムをつかめば一気に、という期待がでてくる。

両強豪以外にとび出してくるとすれば千葉と静岡。特に静岡は、茨城があまり上ばかりを見すぎていると足元をすくうだけの攻守を備えている。



得点争い

茨城追う東京、三重、大阪ら

◇天皇杯(男女総合得点)当然のことながら5部門フルエントリーの北海道、茨城が有利だが、北海道の現状は大量点を望めず、茨城の先行を、一般に得点源のある東京、愛知、三重、高校に希望のある秋田、愛媛、平均した力をもつ大阪あたりが追いあげる展開だろう。

◇皇后杯(女子総合得点)2部門出場は北海道、東京、茨城だけ。

北海道は一般の不利がそのまま響き、つまるところ東京、茨城。

両者が崩れるようだと大混戦。三重、大阪、愛媛、熊本、愛知などでもつれる。

茨城国体地域代表決定記録

(太字が代表)

○……北海道……○

▽一般男子
函館有斗ク 24—15 室蘭ク

▽同女子
室蘭東OG 6(延)5 室蘭ク

▽高校男子
函館有斗 9—5 函館大谷

▽同女子
函館女商 7—2 室蘭商

▽教員
南北海道 15—12 鶴陵ク

○……東北……○

29頁の第1回東北総合体育大会の項参照。

○……関東……○

▽一般男子第1〜第4代表決定戦

▽A組
神奈川(全神奈川) 31—15 群馬(甘楽ク)
埼玉(大崎電気) 21—12 栃木(AOK栃木)

▽同B組(リーグ)
東京(三景) 29—14 山梨(日川ク)
東京 26—7 千葉(第3術科校)
山梨 23—10 千葉

【順位】①東京②山梨③千葉

▽同第5代表決定戦
栃木 17—15 群馬

▽同第6代表決定戦
群馬 21—11 千葉

▽同女子第1、第2代表決定戦
東京 11―6 埼玉
(東京重機) (大崎電気)
栃木 22―1 神奈川
(日立栃木) (全神奈川)
▽高校男子
山梨 12―7 神奈川
(塩山商) (選抜)
▽同女子
東京 10(分)10 千葉
(選抜) 抽せん勝 (選抜)
▽教員
千葉 34―11 埼玉
(フェニックス)

○……北信越……○

▽一般男子第1・第2代表決定戦
富山 34―11 新潟
(氷見ク) (柏崎ク)
石川 19―5 長野
(金沢市役所) (かつらお野ク)
▽同第3代表決定リーグ
福井 24―10 新潟
(北陸電力)
長野 18―12 新潟
福井 23―10 長野
【順位】③福井④長野⑤新潟
▽同女子
石川 11―3 長野
(小松OG) (小商ク)
▽高校男子
富山 34―5 福井
(選抜) (選抜)
▽同女子
富山 3―2 石川
(選抜) (小松市女)
▽教員
福井 23―11 富山

○……東海……○

▽一般男子第1・第2代表決定戦
愛知 16―12 静岡
(大同製鋼) (静農ク)
三重 18―10 岐阜
(本田技研) (二和家具)
▽同第3代表決定戦
岐阜 15―13 静岡
▽同女子代表決定リーグ
愛知 25―0 岐阜
(ブラザー工業) (三洋電機)
三重 22―0 静岡
(田村紡) (浜南ク)
三重 30―3 岐阜
愛知 16―2 静岡
静岡 13―5 岐阜
三重 12―8 愛知
【順位】①三重②愛知③静岡④岐阜
▽高校男子
愛知 10―9 岐阜
(選抜) (選抜)
▽同女子
静岡 8―5 岐阜
(清水商) (選抜)
▽教員
静岡 13―11 愛知

○……近畿……○

▽一般男子第1~第3代表決定戦
兵庫 18―13 和歌山
(神戸製鋼) (和商ク)
大阪 30―15 京都
(湧永薬品) (京都ク)
奈良 17―15 滋賀
(奈良ク) (全滋賀)
▽同第4・第5代表決定リーグ
和歌山 15―14 京都
京都 26―12 滋賀
和歌山 21―10 滋賀
【順位】④和歌山⑤京都⑥滋賀
▽同女子
京都 13―6 兵庫
(京都ク) (全神戸)
▽高校男子
大阪 14―6 奈良
(全大阪) (選抜)
▽同女子
大阪 11―2 和歌山
(選抜) (選抜)
▽教員
大阪 11―2 兵庫
(イーグルス) (スワロー)

○……中国……○

▽一般男子第1・第2代表決定戦
広島 24―12 鳥取
(三菱レ大竹) (境港市役所)
山口 24―21 岡山
(徳山ク) (倉敷商OB)
▽同女子
山口 15―11 広島
(徳山高OG) (全広島)
▽高校男子
山口 21―10 島根
(下関中央工) (選抜)
▽同女子
広島 8―4 山口
(選抜) (選抜)
▽教員
岡山 26―10 山口

○……四国……○

▽一般男子代表決定リーグ
香川 17―16 高知
(瀬戸ク) (高知ク)
愛媛 22―8 高知
(住化菊本)
愛媛 棄権 香川
【順位】①愛媛②香川③高知
▽同女子
香川(香川ク)の認定優勝
▽高校男子
愛媛 16―10 高知
(選抜) (幡多農)
▽同女子
愛媛 8―3 香川
(新居浜商) (三本松)
▽教員
高知 26―17 香川

○……九州……○

▽一般男子第1・第2代表決定戦
長崎 19―14 鹿児島
(佐世保ク) (海上鹿屋)
熊本 23―13 福岡
(トヨタ自動車) (BSタイヤ)
▽同第3代表決定戦
福岡 22―15 鹿児島
▽同女子代表決定リーグ
佐賀 9―7 鹿児島
(全佐賀) (鹿児島ク)
熊本 29―1 鹿児島
(立石電機)
熊本 21―5 佐賀
【順位】①熊本②佐賀③鹿児島
▽高校男子
福岡 25―10 沖縄
(選抜) (選抜)
▽同女子
鹿児島 8―7 大分
(国分実業) (選抜)
▽教員
鹿児島 35―20 沖縄

東北で『ミニ国体』開く

新しいスポーツの集いとして注目された第1回東北総合体育大会が、その名も「ミニ国体』と銘打って9月6日から8日までの3日間、岩手県下で開かれ、盛岡市で行われたハンドボールも熱戦がつづいた。

日本体育協会などは、来年度から国体の抜本的な改正を行うことに決め、すでにハンドボールをはじめ全競技が新しい実施要領（注本誌115号参熱）を発表しているが、それとともにブロック（地域）国体などを開いて、国体を〝国民総参加方式〟に変ぼうさせることも構想の中へ織りこんでいる。

今回の東北総体は、全国に先がけてそれを実現したもので、これまで競技別に実施されてきた東北選手権や、国体東北予選をひとまとめにして開いた。

ミニ国体と呼ばれるように東北6県から五千六百人の選手、役員が参集、岩手県下11市町村でハンドボールなど22競技を争った。

ハンドボールは、盛岡市の岩手大体育館で、国体予選と第27回東北選手権（一般）を兼ねて行われ高校男女を秋田勢が制したほか、注目の一般女子は東北ムネカタを送った福島が優勝を飾った。

来年の第2回大会は秋田県下で開かれる予定。

▽一般男子予選ラウンド（3試合）

岩手（盛岡商友会）15－14 福島（SGク）

宮城（東北学院OB）22－16 山形（山形ク）

青森（七戸ユニオン）16－14 秋田（大曲富士ク）

▽同決勝リーグ

宮城 11－6 岩手

青森 10（分）10 岩手

青森 17－10 宮城

【順位】①青森②宮城③岩手

▽同女子1回戦（1試合）

宮城（けやきク）12（延）10 青森（あすなろク）

▽同準決勝

岩手（全岩手）5－3 秋田（全和洋）

福島（東北ムネカタ）20－3 宮城

▽同決勝

福島 16（6－1、10－1）2 岩手

▽高校男子1回戦（2試合）

福島（全福島）11－9 青森（選抜）

岩手（盛岡商）9－8 山形（大石田）

▽同準決勝

宮城（仙台育英）12－7 福島

秋田（湯沢）17－7 岩手

▽同決勝

秋田 10（4－4、6－3）7 宮城

▽同女子1回戦（2試合）

福島（全福島）7－2 青森（選抜）

岩手（全岩手）4－2 山形（竹田女）

▽同準決勝

秋田（和洋女）7－3 岩手

宮城（涌谷）9－4 福島

▽同決勝

秋田 10（4－4、6－3）7 宮城

▽教員1回戦（2試合）

秋田 21－19 山形

宮城 34－9 青森

▽同準決勝

福島 26－20 宮城

岩手 32－14 秋田

▽同決勝

岩手 21（8－7、13－6）13 福島

◇

▽国体一般男子東北第3代表決戦

福島 15－7 山形

▽同第4代表決定戦

山形 19－8 岩手

【注】国体東北代表は一般男子が青森、宮城、福島、山形に決定、その他の4部門は東北総体の優勝チームとなる。

本田技研鈴鹿3年ぶり

主力欠く大同2位

各地の記録

第26回東海選手権は8月31、9月1日の両日、岐阜県民体育館に東海県の予選勝者、男女各4チームが集まり行われた。

男子（トーナメント）は、3連勝を目指していた大同製鋼（愛知）が、藤中、中井ら主力5人を国際試合（全日本対東ドイツ）に送りこんだため、手うすな陣容となったものの、静農ク（静岡）の食下りをかわして決勝へ進出した。

しかし、決勝では、有力選手を揃えた本田技研鈴鹿（三重）に押しまくられダブルスコアで敗れた。本田は3年ぶり3度目の優勝。

女子（リーグ）は、予想どおり田村紡（三重）とブラザー工業（愛知）が圧倒的な力を示し、最終戦で対決、前半、優位に立った田村紡が後半激しく迫るブラザーを振り切って全勝、2年連続9度目の優勝を遂げた。

▽男子準決勝

本田技研鈴鹿（三重） 18（9－4 9－6）10 二和家具（岐阜）

大同製鋼（愛知） 16（7－5 9－7）12 静農ク（静岡）

▽同3位決定戦

二和家具 15（10－6 5－7）13 静農ク

▽同決勝

本田技研鈴鹿 18（8－5 10－4）9 大同製鋼

▽女子リーグ

ブラザー工業（愛知） 25（11－0 14－0）0 三洋電機（岐阜）

田村紡（三重） 22（10－0 12－0）0 浜南ク（静岡）

田村紡 30（15－2 15－1）3 三洋電機

ブラザー工業 16（8－1 8－1）2 浜南ク

浜南ク 13（5－0 8－5）5 三洋電機

田村紡 12（6－3 6－5）8 ブラザー工業

【順位】①田村紡3戦、全勝②ブラザー工業2勝1敗③浜南ク1勝2敗④三洋電機3敗

関東は東京勢久しぶり

三景と東京重機勝つ

第21回（戦前からの通算第30回）関東選手権は8月24、25の両日群馬県前橋商高体育館で行われた。

男子は2組に分けた予選ラウンドのあと、その勝者同士が優勝を争うシステムが採られ、予想どおり三景（東京）と大崎電気（埼玉）が勝ちあがり、三景が巧者ぶりを発揮して制勝、3年ぶり2度目の優勝を飾った。

女子は、7チームのトーナメントで争われ、東京重機（東京）×日立栃木の顔合せから東京重機が押し勝って2年ぶり3度目の優勝を遂げた。

東京代表の男女優勝は昭和32年の東京ク（男）、日体大（女）以来17年ぶりのこと。なお、茨城代表は、この大会が茨城国体予選を兼ねていたことから男女とも出場しなかった。

▽男子予選ラウンドA組トーナメント1回戦

全神奈川 31（16－7 15－8）15 廿楽ク（群馬）

大崎電気（埼玉） 21（12－4 9－8）12 AOK栃木（栃木）

▽同2回戦

大崎電気 19（7－6 12－9）15 全神奈川

▽同B組リーグ

三景（東京） 29（13－4 16－10）14 日川ク（山梨）

三景 26（15－4 11－3）7 第3術科学校（千葉）

日川ク 23（9－2 14－8）10 第3術科学校

▽同決勝

三景 19（10－6 9－9）15 大崎電気

▽女子トーナメント1回戦（3試合）

大崎電気（埼玉） 26（11－0 15－3）3 山梨商OG（山梨）

日立栃木（栃木） 15（8－0 7－4）4 水郷ク（茨城）

全神奈川 22（10－5 12－6）11 前橋ピジョンズ（群馬）

▽同準決勝

東京重機（東京） 11（8－5 3－1）6 大崎電気

日立栃木 22（13－1 9－0）1 全神奈川

▽同決勝

東京重機 9（5－3 4－3）6 日立栃木

女子は室蘭東OG初優勝

第4回北海道クラブ選手権は8月30日から3日間、室蘭市立体育館に男子5、女子3チームが参加して行われた。

男子は函館有斗クが、準決勝前半に室蘭東OBに食い下られたものの、今年も強味を示し4年連続優勝を飾った。

女子は、商門クが棄権したため室蘭東OGと室蘭クが優勝を争い延長へもつれこれ大激戦の結果、室蘭東OGが後半、貴重な決勝点をマーク、室蘭クの4連勝を阻む初優勝となった。

▽男子1回戦（試合）

室蘭東OB 21－14 函館大谷ク

▽同準決勝

函館有斗ク 22（8－11 14－5）16 室蘭東OB

室蘭ク 25（13－8 12－7）15 登別ク

▽同決勝

函館有斗ク 24（10－7 14－8）15 室蘭ク

▽女子決勝

室蘭東OG 7（2－2 3－3 …… 1－1 1－0）6 室蘭ク

岩手教員、岩手大破る

▼第26回岩手県民体育大会ハンドボール競技（8月）

▽一般男子1回戦（1試合）

盛岡市役所 23―17 岩手トヨペット

▽同準決勝

岩手教員 27―10 盛岡市役所

岩手大 17―11 志高OBク

▽同決勝

岩手教員 25（13―5、12―8）13 岩手大

▽高校男子準々決勝

盛岡商 16―7 生活学園

花巻北 11―4 久慈

盛岡四 21―10 釜石南

盛岡一 17―4 一関工

▽同準決勝

盛岡商 7―6 花巻北

盛岡四 9（延）8 盛岡一

▽同決勝

盛岡商 13（7―3、6―3）6 盛岡四

▽同女子準々決勝

盛岡二 13―1 黒沢尻南

花巻農 8―1 水沢

花巻南 16―3 大原商

岩手女 9―0 花巻北

▽同準決勝

盛岡二 11―4 花巻農

花巻南 6―2 岩手女

▽同決勝

花巻南 5（3―1、2―1）2 盛岡二

男子で長野が抬頭

▼大阪府高校総合選手権（8月・桃山学院高）

▽男子準々決勝

都島工 10―8 堺東

初芝 15―13 豊中

桃山学院 10―9 此花

長野 19―14 大商

▽同準決勝

初芝 15―13 都島工

長野 19―10 桃山学院

▽同決勝

長野 22（9―12、13―6）18 初芝

▽女子準々決勝

池田 15―5 食品産業

住吉学園 9―1 門真

女短大附 10―6 和泉

大谷 11―3 摂津

▽同準決勝

住吉学園 14―2 池田

大谷 7―5 女短大附

▽同決勝

大谷 6（2―1、4―1）2 住吉学園

中学大会記録

◇名古屋市・市中学校大会（7月）

参加＝男20、女17

▽男子準々決勝

明豊 20―6 守山西

東港 18―5 鳴子台

名塚 12―10 笹島

菊井 27―5 港南

▽同準決勝

明豊 15―9 東港

名塚 14―11 菊井

▽同決勝

明豊 14（5―7、9―4）11 名塚

▽女子準々決勝

桜田 23―1 港南

名塚 15―5 菊井

猪高 12―5 天白

港北 12―4 東港

▽同準決勝

桜田 7―5 名塚

港北 7―4 猪高

▽同決勝

港北 14（6―6、8―7）13 桜田

▼第26回全日本総合選手権実連男子第4代表決定戦1次試合（9月8日・名古屋・大同製鋼体育館）

二和家具（岐阜） 29（15―9、14―7）16 セントラル自動車（神奈川）

日新製鋼呉（広島） 32（16―8、16―10）18 新日鉄名古屋（愛知）

▼同2次試合（9月9日・大同）

二和家具 19（5―11、14―9）17 日新製鋼呉

この結果、3次試合（代表決定戦）が近く二和家具×三菱レ大竹（広島）の間で行われる。

投書欄　明日への提言

女子の選手層に厚味を

オリンピックに女子が採用され、男子のかげにかくれていた日本の女子界も、陽の当る場所へ出て来た感じがしますが、一人のOGとして国内のシステムに私案を投じたいと思います。

それは、現状ではあまりにもトップ層とその次のランクのチームと実力差が開きすぎており全般のレベルアップにマイナスな面が見受けられることです。

このままでは、日本の女子界の頂点は、極めて小数の選手によって支えるだけで、選手層に厚味を増すことは難しいでしょう。

そこで、全日本選手権（総合）を思い切って1・2部制に分け選手たちに「勝敗的興味」をまず抱かせることを考えてみて欲しいのです。1部（Aグループ）は8チーム程度のリーグ、2部（Bグループ）はその他すべてのチームのトーナメントとしてみてはどうでしょう。去年でしたか、アイスホッケーが、このような形式を採ったはずですが。

1、2部はもちろん入替えを行うようにします。

それと、何年も前からいわれている企業チームの国体辞退を企業側で自発的に考えていただきたいものです。

【東京・桜井佳代子・会社員】

本誌既刊号を整理

日本協会では、昭和35年6月に機関誌「ハンドボール」を発刊し、皆様の支援を得て現在に至っておりますが、すでに1回につき100部の永久保存用だけでも一万二千冊を越えることになり、その他の残部の格納が限界に達しました。

そこで、49年10月31日をもって、一部を整理、廃棄することにいたします。

創刊号から第50号までのうちバックナンバーをご希望のかたは、10月25日までに往復はがきに希望号数、部数、送付先を書き編集部あてお申しこみ下さい。

在庫があります場合は、折り返し、料金その他をご通知申しあげます。

なお、51号以降につきましては改めて本誌上に告知いたします。

テキスト新版を発行

日本協会では、普及指導部編集による「ハンドボール・テキスト」の新版を刊行発売いたしております。頒価は1冊300円（ほかに送料実費）

ご希望のかたは日本協会事務局あてお申しこみ下さい。

なお、同テキストの第1版は品切れです。

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一二四号
昭和四十年六月　第三種郵便物認可
昭和四十九年九月二十五日印刷　発行所
昭和四十九年十月一日発行　日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南一-一-一
電話　大代代(467)三二一一
振替　東京五八三四八番
編集兼発行人　保坂周助
定価一百五十円
(年間購読料二千三百円)